

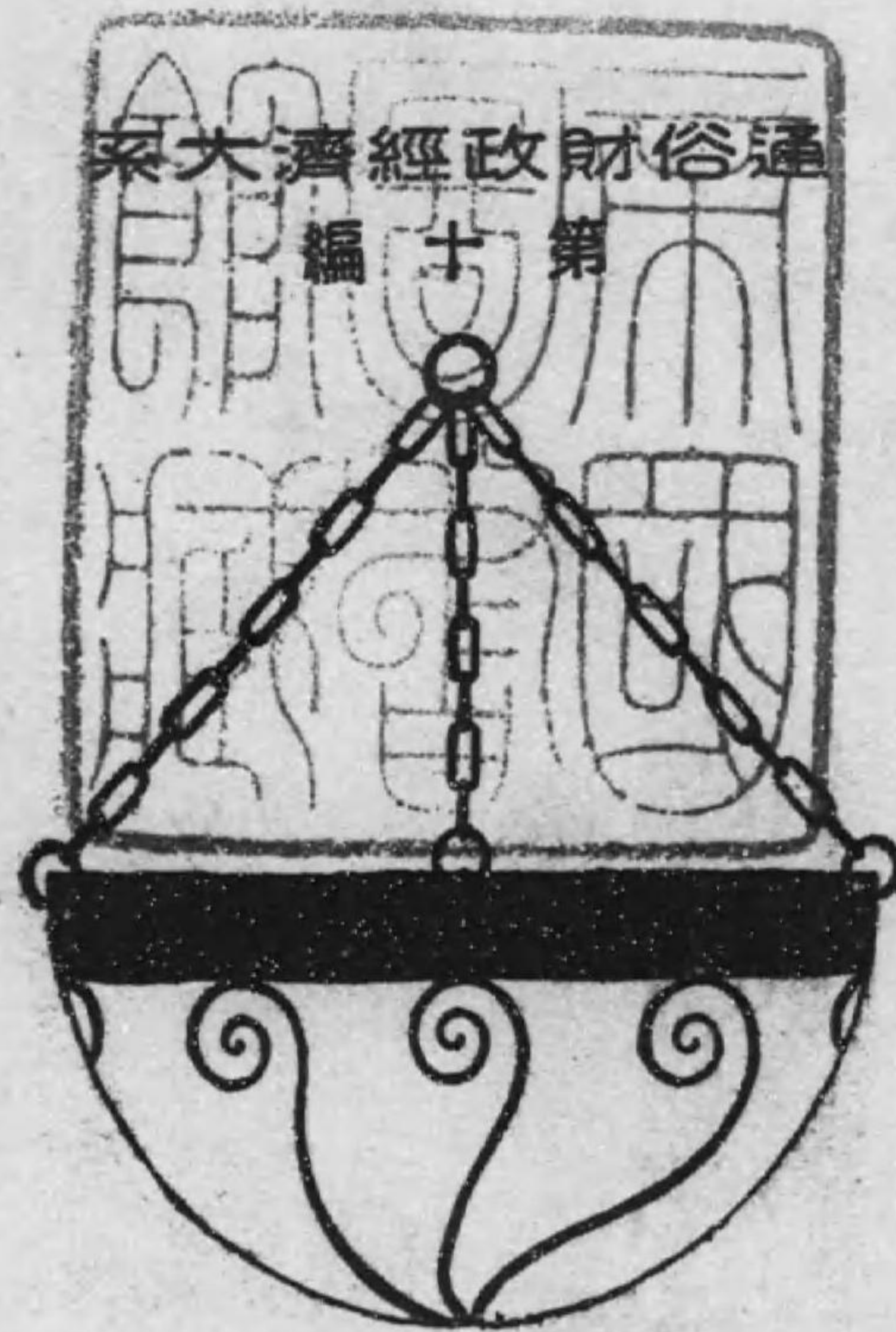
527
66

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50^{6m} 1 2 3 4 5

始



36.4.28



通俗財政經濟大系

第十編

下田將美著

物價の見

日本評論社版

大正

13. 10 24

内交

527-66

はしがり

歐洲大戦亂を境にして物價は世界的に大騰貴を來した。英米佛伊は勿論のこと瑞西、支那に至るまで、今日と戦前との物價を比較すると驚く可き騰貴率を示してゐる。國を堵しての大戦争に、莫大な戦費を支出し、あらゆる物資をたゞ砲火劔戟の渦巻の中に投げ入れた暗澹たる四箇年の後に、物價が非常な昂騰を來したとて直接交戦の國々から云へば敢て不思議な現象であるとは云へない。我國も亦交戦國の一員ではあつた。しかし地の利と、戦亂の直接の當事國でなかつただけに、戦亂によりて得る所は失ふ所よりも遙かに大きく、米國と共に戦によつて肥え、豊かになつた國に算せられるに到つた。しかるに、今日の物價の趨勢はどうかと云へば、米國や加奈陀に較べて遙かに騰貴率が高い許りでなく最も戦争によつて失費の多かつた英國と較べてすら驚く可き高率を示して居るのである。これ果して何人の罪なのであらうか。これ果して尋常茶飯の已むを得ないこととして漫然見過して然る可き間



十三

題であるだらうか。私はこれを實に國民の經濟生活上最も重要な大問題であると考へざるを得ない。寺内内閣や、加藤内閣は此大勢の重大さを思つて、所謂物價調節を行つた。しかし其行つた所は果して根本問題に觸れた調節であり得たかどうか。それは其結果が明白に自ら物語つてゐる。私は此重大問題が、朝野からどうして眞劔に根本的に取扱はれては來なかつたかを思つて、暗然たらざるを得ないものである。

思ふに物價問題は最も廣く深く、あらゆる經濟問題の根本基調として横はるものである。これは決して一時的の問題ではなくして、永久の問題であり、不斷の考量を要する問題である。これは決して一部の經濟界にのみ影響と交渉とを持つものではなくして、政治問題にも社會問題にも、直接に關係をもつ問題である。これは單に一部の團體や人々にのみ作用するものではなくして、人間として此社會に經濟生活を營んで居る者にとつては、それが俸給生活者であると、商人であると、勞働者であるとを問はず、直接の交渉を持つものである。かく考へて來れば、物價問題は大は國家から、小は一私人に

至るまで最も密接で、常住に離れることの出來ない、大問題であると云はなければならぬ。

かゝる大問題が何故に日本ではまだ重大視される程度が尠いのであらうか。それは云ふまでもなく物價に關する一般的研究のまだ足らぬと云ふことに基因すると云はねばならない。本書は此意味に於て最も通俗的に解り易く、物價なる觀念を説かうとして試みられたものである。元來物價の研究は最も平凡のやうに見えて然らず。其範圍も廣く、學問的基礎も深い。之を通俗的に説いて餘す所無しとするのは、容易に見えて、實は容易でない。本書の説く所、部分的には猶説いて盡さざる所多きは自ら之を知る。ただこれによつて、物價に關する基礎的觀念だけは、説いて誤なきことを信するものである。

大正十三年六月梅雨明けの日

筑波臺下の書房にて

下 田 將 美

物價の見方 目次

總論	一
第一章 物價とは何であるか	九
一 物價の意義	九
二 物價指數を求めらる順序	一五
三 物價指數の計算の出し方	二六
四 單純平均と加重平均と云ふこと	二九
五 完全無缺な計算法はまだない	三七

六 我國現在の代表的物價調……………三三

(イ)日本銀行の物價調査 (ロ)東京商業會議所の物價調査 (ハ)大阪商業會議所其他の物價調査 (ニ)農商務省の物價調査 (ホ)社會局の物價調査 (ヘ)東洋經濟新報とダイヤモンド社の物價調査

七 諸外國の物價調査……………六二

✓第二章 物價は如何にして動くか……………六五

✓一・二方面から見た動き方……………六五

二 需給關係と效用……………六七

三 需給を自然的に調節する生産費並に基礎價格と云ふもの……………七四

四 人爲的の需給増減……………八二

五 獨占價格と再生産の出来ないものゝ價格……………八五

✓第三章 一般的に物價を動かす原因……………九〇

一 通貨と信用證券……………九〇

二 貨幣數量説による説明……………九五

✓第四章 物價の變動は一般にどう影響して來るか……………一〇四

一 物價騰貴は生産者に利益を與へる……………一〇四

二 物價騰貴は消費者に不利を與へる……………一〇八

三 物價騰貴は債務者に有利となる……………一一

✓第五章 物價の變動は貿易と國家の財政上にどんなに影響するか……………二四

一	輸出と輸入は自然的に物價で調節される……………	二四
二	近時の物價騰貴と貿易……………	二六
三	物價騰貴は國費の膨脹を來す……………	二九

第六章 物價と生活費問題……………二六

一	物價は生活問題の基礎である……………	二六
二	生活必需品と労働問題……………	三三
三	一般物價と切放して考へねばならぬ生計調査……………	四三

第七章 政府の力による物價調節……………四五

一	物價調節と云ふこと……………	四五
二	通貨の縮少……………	四八

三	金輸出禁止の解禁……………	五四
四	通貨縮少策としての金利引上と對外投資並に公社債の募集……………	五九
五	暴利其他の取締……………	六三
六	政府自ら需給の調節に參與する方策……………	六七
七	政府の物價公定……………	七〇
八	政府自ら消費縮少……………	七四

第八章 民間の力による物價調節……………七六

一	生産者から消費者の手に渡るまで……………	七六
二	大規模の小賣業……………	八四
三	消費組合の發達……………	八九

四 公私設の市場……………二〇六

五 一般の人は物價の騰落について注意深くあらねばならぬ……………二一〇

六 消費者各自の反省と生活の改善……………二二四

第九章 物價問題の歸趨……………二二七

一 價値經濟か價格經濟か……………二二七

二 物價は高いがよいか、安いがよいか……………二三三

三 生産を壓迫しない低價方針……………二三八

四 低價主義と勞銀との關係……………二四三

第十章 我國の物價の大勢……………二五五

一 歐洲大戰前までの物價の趨勢……………二五五

二 歐洲大戰中の物價……………二六〇

三 戦後の物價消長……………二六九

四 大震災前後の物價……………二七六

第十一章 俸給生活者と物價問題……………二八八

一 頭の勞働者は筋肉勞働者より生活苦が激しい……………二八八

二 俸給生活者の家計……………二九四

三 俸給生活者と必需品物價……………二九九

四 頭の勞働者の團結……………三〇四

目次(畢)

物價の見方

論

下田將美著



吾々が此世の中に住んで經濟生活を營んで行くに當つては、さまざまの經濟現象がそれらの重要性を以て生活に作用して來るが、其中でも、最も一般的で、誰にでも普遍的に重大な作用と影響とを及ぼすものは實に物價の問題だと云はなければならぬ。何故ならば物價の騰落は個人の生活はもとよりのこと、會社、銀行のやうな法人にも亦、國家其ものゝ經濟生活にも、直に緊切な影響を及ぼして來るばかりではなく、他の經濟現象は、其範圍が比較的狭くて單に經

濟界にそれ／＼の作用をなすに止まるものが多いが、物價は單り經濟界ばかりでなく、社會上にも亦、一般の思想の上にも直接で、且つ重大な影響を及ぼすものだからである。

其昔、人類がまだ進歩しなかつた時代にあつては所謂物々交換で自分の欲しいと思ふものを牛や羊に換たり、農産物と換たりして得て居つたのであつたが、其後媒介物として貨幣が用ひられるやうになつてからは、あらゆるものゝ交換の標準が貨幣で現はされるやうになり、こゝに價格が一定した貨幣で示されるやうになつて來たのである。そこで今日の吾々の社會にあつて生活して行くには、値段即ち、一定の貨幣で現はされた價格が非常に重大なものとなつて來た。金が欲しい、金が大事だといふのは、云ひかへて見れば其金で欲しいものが得られるからのことである。それ故價格の騰つたり、下つたりすることは、吾々の經濟生活にとつては直接に非常な影響を及ぼすもので、物價が重大視される所以も是に在るのである。之を個人の生活に就て云へば、吾々はいろ／＼の物を生産して、それを賣つたり、或は肉體

的の労働を賣つて金に換たり、頭の労働をやつて、つまり知識を賣つたり、賣るものゝ種類はさまざまに異なるけれども、兎もかく種々の働きを賣つた所得によつて、われ／＼の生活をするに必要なものを買つて生きて行きつゝあるのである。そこで人が此世に生きて行く爲めに先づ第一に無くてはならぬ買物は何かと云へば、それは生活必需品であつて、着るための衣服であるとか、住むための家であるとか、食ふための米、味噌、醤油であるとか、其他いかなる生活にもなくてならぬ必要ある品々である。しかるに今日の人類の大多數は貧しいものであるから、生産と消費の關係から云へば、自己の生産によつて得た金によつて消費するものゝ大部分は多數の人にとつては此生活必需品だと云ふことになる。もしも生活必需品の物價が非常に高くなつて、所得がこれに伴はない時には、すぐに所謂生活難に襲はれてくることになる。それ故生活必需品の物價の騰落は恐らくは此世に生活を營む何人にとつても最も重大な關係をもつものだといふはなげればならないであらう。是は個人のことであるが、物價は同じやうに會社銀

行にも直接の影響を持つてくる。詳しくは後章に於て述べることにするが、物價の上ると云ふことは直に貿易に作用して輸出を減退させ、輸出業者や、輸出品の生産に關係する總ての者に打撃を與へたり、物價の騰貴に伴つてや、もすれば生産過剰になつて事業に手違ひと失敗とを生じさせたり、其影響する所は決して少くはないのである。更に國家と云ふ立場から見ても、國家も元來、一定の収入と支出とを定めて、其豫算によつて年々の財政計畫を定めて行くものであるから、物價が非常に、豫想外に高下する時には、此豫算に狂ひを生じて歳入歳出の辻褄が合はなくなり、さまざまの不都合を生じてくることになるのである。

斯様に物價は吾々個人の生活にとつても、法人や國家にとつても非常に重大な影響をもつものなのであるが、更に重大なことはそれが單に經濟上の影響ばかりではなくして、他の方面にも同じやうに見逃し難い大關係を及ぼして行くことである。前に述べたやうに吾々の今日の社會には貧しい者の方が、富んだものよりも非常に多いのであるから、生活必需品の物價が上る

となると、すぐに生活に狂ひを生じて、労働者は労働賃銀の値上げをして貰はねばならず、月給生活者も矢張り増給の要求をすることになる。ところが、多くの場合物價の騰貴と勞銀の値上げとは一致しないで、結局は物價が上れば、いつかは勞銀も上るにしても、其時期に可成りの差があるので、傭人と被傭人との間に爭議が起り易く、ストライキやサボタージュの發生と云ふやうな事が起つてくる。更に物價が騰つて生活が苦しくなつてくれば、勢ひ人の思想も險惡になつて、間違つた途に奔るものも少なくなつてくる。衣食足つて禮節を知ると云ふ言葉は甚だ平凡ではあるが、動かすことの出来ない人間本來の聲である。かやうに考へ及ぼしてくると物價と云ふものが、どれ程吾々の私的生活にも、又社會上にも重大なものであるか、極めて明確になつてくることと思ふ。

そこで歐米の諸國では今世紀に入つてから經濟學者も、政治家も、一般の國民も、非常に熱心に物價の研究をはじめ出した。事業家はこれを以て經濟界のバロメーターであると看做し、

労働運動者はこれを以て労働運動の主要なる目標物とするやうになり、経済學者で、これを専門的に研究して居るものも少くないのである。同時に歐米の主要都市では、それらの權威ある機關が毎月、或は毎週、小賣物價なり卸賣物價なりの調査をして、きまつた物價指數を發表し、經濟界の實際問題の指針に供して居るのである。殊に近年に及んでからは物價の高低調査がそのまゝ實際的の經濟政策に應用されることになつて、單に一つの指針と云ふだけでなく、立派な原動力ともなり、政策を左右する基礎ともなつて來たことは注目し値することだと云はなければならぬ。其最もよい實例は英國の労働問題を解決する上に物價がもつてゐる地位であつて、英國では、エコノミストやステイチスト等の有名な權威のある經濟雜誌が物價指數を發表して居る他に、政府の労働省が矢張り此發表を續けてゐる。しかし、此物價指數は決して經濟界の一の参考と云ふ意味のみで發表して居るのではなく、物價の消長がそのまゝ労働者の決定に利用されて、生活必需品の物價の騰貴率を基礎として労働者の労働の値上げ率を定

めることになつて居るのである。ニュージールランドなどは殊に此制度が發達して居る。其他獨逸でも生活必需品の物價指數の騰落の率を基礎として労働を調節するの制度を採用してゐる。云ふまでもなく労働問題の中では労働は最も重大な問題として取扱はれる可きものであつて、多くのストライキは大概は労働に關する資本家との意見の相違から行はれるのであるが、其労働が何故それ程重大であるかと云へば、それは労働者が生きて行く上に一番大切な生活費とも密接な關係を持つてゐるからである。今日ではあらゆる労働者が、人間として當然生きる權利として、誰もが、最低生活費を得ることを主張して居る。ところが、生活必需品の物價ばかり上つて労働がこれに伴はなければ、生活其ものがすぐに脅かされてくるので、あらゆる犠牲を拂つても抗争運動を起して行くことになつてくるのである。英國や獨逸ではこの現象を良く理解し、生活必需品の物價指數の消長を其まゝ労働變動の基礎として實用に供して居るのは、極めて聰明な、同時に當然すぎる程當然なことだと云はなければならぬのである。

かう云ふ國々に較べるとまだ我國は一般に、物價の重大な意義を、それ程深刻に理解して居ない憾がある。しかし一般の理解がどうであらうとも、重大なものは依然重大であつて、何の變りもない。私は今後益々歐米に於ける物價の研究が盛んになつて行くであらうことを信ずると共に、我國でも、もつと一般の人士が此重大問題の研究に力をそぐやうになつて貰ひたいと思ふものである。

第一章 物價とは何であるか

(一) 物價の意義

普通世間で物價と云へば物の値段を指すもの、例へば米が一升何十錢であるとか、牛肉が百匁で一圓何十錢であるとか云ふことを現はすものであると考へられて居るが、さういふ風に或る一つの品物の値段を金で表はしたものは價格であつて、物價とは云はないのである。物價とは、さういふ個々の物の價格よりも、もつと廣い全體的の意義をもつものである。

もとより物價の基礎になるものは個々の商品の價格であつて、物價を研究する爲めには、個の商品の價格の騰落を度外視することは出来ないのは云ふまでもない。此價格と云ふ事について普通世間では價格も價值も一所に混同して考へる人が多いが、經濟學上の定義から云ふ

と、これははつきり區別されて使はれなければならないので、早く云へば價値と云ふのは、値打のことで、價格と云ふのは値段のことである。しかしこゝでは、それらを詳しく説明する必要はないので、たゞ物價研究の基礎になつてゆく最も大切な、物の價格と云ふことについて一寸説明を加へて置くことにする。

ある物を他のものと交換する場合にその値段即ち價格は、實物で現はす場合と貨幣で現はす場合と二通りある。總論の中にも一寸述べて置いた通りに、まだ此社會が進歩しない、無智な時代には交換の媒介をなすものは矢張り實物で、物の價格を表はすのに牛一頭、羊二頭と云ふやうに、家畜で表はす時もあるれば、弓だの刀などで表はした時もあった。今日でも文化の程度の極めて低い野蠻國では依然として實物を交換の媒介物に用ひてゐる所も多い。最近熱帯地方の野蠻國を探検して來たある外人の報告に、土人の間には女を全く商品視して賣買結婚が行はれ、普通花嫁一人が牛二頭であつたと云ふやうなことが報せられて居つたが、これなどは願

始時代の價格を如實に現はしたものと云つてよいであらう。しかし今日の文明國では價格を實物で表はすことは殆んど無くなつて、たゞ金銀の地金相場であるとか、小作料であるとか云ふやうな特殊なものに限つて實物價格を定めて居る他は、總て貨幣で物の價格を表はすことになつてしまつた。それ故今日、價格と云へばそれは總て通貨價格即ち、貨幣で表はしたものと云つて差支へないのである。

この貨幣で表はされた商品の價格は素より品物の種類によつてそれづくに異つてゐる。同じ種類のものでも品質なり形狀なりによつて又それづくに値段に高下を生じてくる。しかし此さまさまの値段は、個々の商品の價格であつて、こゝに云ふ物價とは違ふのである。

しからば物價とは何であるかと云ふと、個々の商品に就ての値段を云ふのではなくして、さういふ値段の總てを全體として見た値段の割合のことを云ふのである。それ故物價は通貨でこれを云ひ現はすことは出來ず、たゞ數字でこれを現はすのである。例へば今日の物價は先月よ

り騰つたと云ふのは、決して一つ一つの商品の値段が先月よりもいくら、いくら騰つたと云ふのではなくして、商品の値段を全體として見た時に先月よりも騰つてゐると云ふ意味なのであるから、貨幣で現はしやうはなく、たゞ数字の割合で現はすより他は仕方はない。それ故新聞などに發表される物價調べるものを見ると必ず前月より物價が二分騰つたとか一分五厘下つたとか、戦争前の何月の物價に比較すると二十何割騰つてゐるとか云ふ風に数字の割合を以て示されてゐるにきまつて居るものである。此總ての商品の値段を数字で現はして、其平均を出したものを物價指數と云ふのである。これらの用語や計算については次の節に詳しく述べることにする。

要するに物價の意義は、商品の價格を全體として廣く見た時の割合を云ふのであるから、個々の物の價格とはどうしても相違して來るのは已むを得ないことになる。たとへば一例として東京商業會議所が大正十三年の四月十五日現在で調査した、東京市日用品小賣物價調をとつて見ると、其物價指數は前旬、即ち同年の四月一日に調べた時よりも總體として平均一分六厘の騰貴になつたと云ふことになつてゐる。しかしこれは商業會議所が市中で小賣りされてゐる日用品の中から標準として穀類及び蔬菜類を十種、嗜好品及び調味料を八種、肉類及び魚類を八種、雜食料品を七種、衣料品を七種、雜品を七種、合せて四十七種の商品を選んで、其れらのもの、四月十五日に於ける標準價格を求めて、それを基礎にして物價指數を出して、前旬と比較して見た所が平均して見て一分六厘騰つたと云ふ意味なのであるから、日用品の小賣物價が騰つたと云つても、何もかも一分六厘づゝの騰貴になつてゐると云ふのでは決してない。中には騰つたものばかりではなく下つたものも、素よりあるわけで、此時の調べの内容を見ても騰貴したものは白米（一等、二等、三等）改良麥、玉葱、馬鈴薯、牛肉（青島）鶏肉、煉乳、干瓢、晒木綿の十一種だけで、値段が前旬から保合つて變らないものが三十三種からあり、麥粉、砂糖、椎茸の三種は反つて下つてゐると云ふことになつてゐる。たゞこれらの總てを平

均して見ると結局物價は一分六厘方前旬より騰つてゐることゝなると云ふ意味なのである。それ故たゞ物價が前旬よりも騰つたと云ふから何もかも上つた、麥粉も砂糖も椎茸も騰つたのであらうと考へるのは非常な間違ひなのである。この間違ひは物價をたゞ漠然と個々の商品の價格のことだと思ひ違ひをすることから生じた誤りで、物價と云ふ以上は個々の商品の價格とは別に、全體の平均を云つたものであると常に頭に入れて置けば、一つ一つの商品については騰落が逆になつてゐても寧ろそれが當然のことだと云ふことが明瞭になつてくる筈なのである。しからば物價と云ふものは甚だあてにならないものではないか、或る者は續いて下落ばかりしてゐても全體の總平均が騰貴になりさへしたらば物價は常に騰つたと云ふことになつてゐて、人をして誤解を招かしめる場合が澤山出てくるであらうと云ふ人もあるかも知れない。もし單に一つの特別な商品だけを目安にして此經濟界の流れを見、景氣不景氣を知らうとするのならばかう云ふ非難の出るのも尤もであると思はれるが、物價は經濟界を総合的に觀測する

一つのバロメーターなのであるから、個々のものに就いて見れば、或は大勢とはまるで反對の現象をたもつものがあるにしても、財界の全體的の流れを見誤ることはない。更に其個々の反對現象を保つ商品の價格も、極めて特殊の事情のもとにあるものゝ他は物價が、引續いて騰貴ばかりして居るのに、其ものだけいつまでも大勢に逆行しつゝけると云ふものは極めて少いので、まづ物價が騰る時には総合的に各商品もそれ〴〵騰貴の傾向をもつものと見て差支へはないわけである。以上で大體物價と云ふものゝ概念だけは記し終つたので、今度は其實際について、細い點に入つて觀察することにする。

(二) 物價指數を求める順序

物價は前節に述べた通りに、價格で表はすことは出來ないので、物價指數なる數字を以て之

を表はすのであるが、此物價指數を算出するには其基礎として代表的商品の價格を必要とすることは云ふまでもない事である。そこで先づ物價指數を算出するまでの順序から述べて見ることにする。

假りに今、東京市中に於ける日用品の小賣物價を調べようとすれば、先づ第一に日用品と見られるさまよの品物の中から代表的と云つて差支へないもの、つまり日用品と云ふ以上は是非とも必要だと思はれるものを何十種でも選んでこれを調査の基礎品目とするのである。例へば、米だとか、大豆だとか、牛肉だとか、砂糖だとか、炭、薪、木綿と云つたやうな種類のものを選ぶのである。しかし一口に米とか炭とか云つても其中にはいろいろの種類のものもあれば、同じ種類で品質に幾段の違ひのあるものもある。それ故調査する品目がきまつたならば、今度は其品目の銘柄を定めなければならぬ。小麦粉であるとか、鹽であるとか、牛乳であるとかと云ふやうに、自然と其品物を代表するやうな一つの銘柄のものが定まつて居

るものは其一個の銘柄の價格をとつて、其商品の代表價格とするが、商品によつて二つ以上の澤山の銘柄を集めて其價格を調査することもある。東京商業會議所の調査でも米は一等二等三等の三銘柄を採り、牛肉なども内地のロースと青島のロースとの二銘柄に分けて調べて居るので、日本銀行などでは石炭などは九州炭、北海炭、常磐炭のそれ々々を十一種の澤山の銘柄に分け、醤油などでも八種類からの多數の銘柄に分けて居る位である。それ故日本銀行の調査は大きな品目から云へば、五十六品であるがこれを一品目の中に包まれて居る銘柄別の調査にすれば百十三種と云ふ多數の商品の價格を網羅して居るわけになるのである。

以上のやうに調査する品目と銘柄とがきまつたならば、今度はそれ々の銘柄の單位、即ち晒木綿なら一反、炭なら一俵、穀類なら一升と云ふやうな、それぞれの標準單位に従つて其時の價格を調査する。此價格は其時の物價指數計算の一番大きいものの基礎となるべきものであるから充分慎重に一番確かな信用ある價格を基にしなければならぬ。各調査機關は何れも此

點では非常な苦心と注意とを拂ふものであつて、それづくに特約を結んだ、信用のある大きな商店に就てこれを調査することになつてゐる。今日では物價は毎月の一日、十五日、晦日の三回に調査するのが普通になつて居るから、そのたび毎に各商店について價格の調査をするので、その面倒さに於て甚だ容易なことではないのである。

さてこれだけの準備が出来たならば今度は指數の計算に移るのであるが、これには先づ一定の基礎となるべき時期を定める必要がある。つまり此時の物價を一切の基礎物價として其後の物價が騰つたとか下つたとか云ふことをきめるのである。世界を通じて大觀して見ると、歐洲大戦争を境にして世界的に物價は大騰貴をして來たので、比較的便宜上此基礎の年月を歐洲大戦争の始まつた時を境に定めて、一目で戦前、つまり戦争の始まつた時から見て、何十割騰つたといふ風にわかるやうにしたものが多い。それ故千九百十四年又は大正三年を基礎の年としたものが多いのである。さて此基礎とす可き年月が定まつたならば、其時に於る標準品目、標準

銘柄の價格を調べてこれを基礎價格とし、其指數を總て百(千のものもある)と定めるのである。同時にこれらの各商店に就て、この指數の總平均の指數を出すのであるから、基礎となる可き總平均の物價指數は申すまでもなく矢張り百である。

新様に基礎標準となる時期の商品の價格が定まり、百と定めた物價指數が出来上つた上で今度は旬毎なり月毎なりの同一銘柄の商品の價格を調査して之を基礎價格と比較して新たな指數を作り出す。つまり基礎價格より其後商品の價格が騰つた場合には、指數は百以上の數になり下つた場合には百以下の數字の出ることは改めてここに云ふまでもない。かくして調査品目の各個についての指數が出たならば、今度はその總平均の指數を出して、其時の物價指數とし、基礎物價指數と比較して百分の幾つ、騰つたとか下つたとか云ふことを知ることになるのである。大概の場合には只之等の指數が發表される時には、前月又は前旬の指數や、前年の同月又は同旬の指數をも比較對照して發表してゐるのが常となつてゐる。

以上物價指數と云ふもの、大體の觀念を頭に入れて實際を理解するために、一つの見本として日本銀行調査局で發表した大正十三年四月分の東京小賣相場調の形式を掲げて置く。

品類	大正十三年四月	十三年三月	前月比較
食料品	二二三	二二五	△〇・九%
燃料燈火	二八八	二九二	△一・四%
服飾用品	二〇六	二〇七	△〇・五%
其他	二〇四	二〇五	△〇・五%
總平均	二一七・四九	二一九・〇二	△〇・七%

備考、本調査は大正三年七月を基準とす、十印騰貴(十五品)△印低落(二十二品)無印保合(六十三品)

此表は歐洲大戦争の勃發した月即ち大正三年の七月を基準として其時の調査品目の價格を

指數百として計算を出したものであるから、この指數を見れば、歐洲戦争の直前の物價とどれ程相違して居るかどわかるわけである。即ち大正十三年四月の總平均指數は二百十七・四九になつてゐるから、大正三年七月の百に對して百分ノ百十七・四九、云ひかへれば十一割七分四厘九毛の騰貴になつてゐると云ふことがわかるのである。猶ほこれは大きな品目の調査であつて、各品目を細かい銘柄について分類して調査したものは次のやうな内容になつてゐるのである。

品目	大正十三年四月	十三年三月	十二年四月	品目	大正十三年四月	十三年三月	十二年四月
内地米	十二〇〇	一九五	一八六	新モス	二二五	二二五	二〇五
内地糯米	二二七	二二七	二三七	久留米絨	一七九	一九七	二〇〇
鮮臺米	一九九	一九三	一六六	捺染絨	△一六一	一五一	一七五
外國米	一五九	一五九	一三六	遠州綿	二〇八	二〇八	二四六
大麥	一六七	一六七	一三一	夜具地	一一五	一一五	一二六

牛	豚	鶏	鮪	鮪	鮪	鮪	鹽	鹽	罐詰	佃煮	竹輪	鹽	醬油	味噌	味噌
肉	肉	肉					鮭	鮎							
三二七	三五七	三〇八	△二六七	△三〇〇	△一六七	△一四〇	二四八	二四八	一四〇	△一六五	二〇六	△三三一	二〇五		

三二七	三五七	三〇八	二八三	四〇〇	二二二	一六〇	二四八	二四八	一四〇	二〇〇	二〇六	二五六	二〇五		
三二七	三五七	三〇八	一五〇	二六七	二〇〇	三〇〇	二八三	二八三	二〇八	二三三	二〇六	二七一	一九二		

日本酒	麥酒	サイダー	味淋焼酎	茶	日本菓子	西洋菓子	菓物	煙草	手巾	半襟	襯衣	靴袋	足袋
二五三	二一〇	二〇七	二〇四	一八九	一六三	一四二	一四二	一八〇	二五六	二二二	二四五	二六一	二六一
二五三	二一〇	二〇七	二〇四	一八九	一六三	一三九	一四二	一八〇	二五六	二二二	二四五	二六一	二六一
二五三	二〇七	一九四	二〇五	一六六	一五七	一六三	一四二	一八〇	二五六	二三三	二四一	二四〇	二四〇

挽押割麥	小麥粉	大豆	大豆	菜豆	馬鈴薯	玉葱	蓮根	其他野菜	切干	海苔	澤庵漬	其他漬物
十二〇〇	一四〇	十二八〇	十一五二	△三二一	十一三二	十二七二	△一〇七	十二八九	二〇九	三〇八	三一八	二五〇

一九一	一四〇	二五三	一四四	三三〇	一一二	一八〇	一二五	二五四	二〇九	三〇八	三一八	二五〇
一四七	一五〇	一七八	一〇八	三一三	一〇七	一五七	一一二	四六七	二二五	三七五	三一八	二八五

縮ネル	新毛織子	羽二重	紅絹裏地	縮緬	甲斐絹	銘仙	毛斯綸	フランネル	セイル	打綿良綿	縫糸	毛糸
二二三	一六四	△一九〇	△二〇七	△一八九	△一九〇	△一六四	三〇〇	二二六	一五四	二二四	二二八	二三七
二二三	一六四	一九七	二一五	一九三	二〇四	一六六	三〇〇	二二六	一五四	二二四	二二八	二三七
二二四	二五八	二八一	三〇〇	二八三	一九二	一七三	三一四	二五六	一六〇	二一四	二三八	二五〇

(三) 物價指數の計算の出し方

物價指數を作り出すまでの順序は前節に述べた通りであるが、さて今これだけの準備の下に、どんな計算方法で總平均の指數を出すのかと云ふと、これは非常に面倒でもあり、又論議の多い難問題なのである。

先づ各調査品目の各別の商品價格指數を出すことは極めて簡單であつて別段面倒な事はないつまり調べようとする時期の商品の價格と基礎年度(旬でも月でもいい)の商品の價格との比例さへとればよいので、基礎指數を百として數學の式で表はせば

$$\frac{P_1 \times 100}{P_0}$$

と云ふことになる(P_0 は基礎年度の商品の價格、 P_1 は比較しようとする年の商品の價格)

例で示せば、或る商品が基礎年度に十圓であつたものが、二十圓になつたとすれば、其時の指數は

$$\frac{20 \times 100}{10} = 200$$

で、其時の其商品の價格指數は、基礎百に對して二百、即ち倍になつてゐることが分るのである。

これまでは平凡で、何の變哲もないが、今度はいろいろな數多い商品の價格の總平均即ち物價指數を出さうとすると非常に面倒な事になつて來るのである。

元來此物價指數の測定と云ふことは非常に新しい學問であつて、經濟學の歴史に遡つて云へば、十八世紀の初め頃から、いろいろな商品の價格を比較研究することが行はれ出し、殊にジェボンスが初めて物價指數なるものを學問的に研究して、カリフォルニアの金鑛發見がど

れ程物價騰貴の原因になつたかと云ふことを發表してからは、經濟上漸次に重大なものとして一般の注意を惹き出したのであるが、何と云つても、これが普遍的に重大事視され、又其研究も盛んになつて來たのは、十九世紀の終りから二十世紀にかけての事である。それも今世紀に入つてから歐洲大戰によつて世界的に物價が大變動を來したので、一時に此研究が各國共に盛んになつたのである。従つて學問上の研究から云へば、まだホンの近年のことに屬し、實を云へば、物價指數の本當に正しい計算方法はまだ發見されないと云ふ可きものなのである。近時世界各國共に物價を専門に研究する學者が非常に多くなつて、米國の有名なフキツシャー教授を初めとしてビゴ、ワルシュ、ヤングと云ふやうなそれらの權威者も出て英國のキーンス氏も熱心にこれを研究し、日本でも藤本博士等は此方面の専門的知識で尊敬すべき研究を續けて居られる。しかし、かう云ふ立派な學者が専心に研究されて居るにも拘らず、残念ながら今日の所では、まだ何人にも異論のない完全無缺な物價指數の算出方法は發見されては居ないの

である。たゞ熱心な學者の研究によつて一年一年に完全に近いものが創造されて行きつゝあると云ふに止まつてゐる。

さう云ふ次第であるから、物價指數の完全に近い算定法はどう云ふものであらうかといろいろの學者の説を學べ、難かしい數學の式を並べ立て、これを研究し批評する事は私の敢て爲し得べきことでもなし、又よしんば試みて見た所でたゞ讀者を苦しめ、難解の嘆を發せしむるに止まつて、本叢書の趣旨にも反し、又、一般的に物價と云ふものを理解する上に、それ程必要なことでもないので、以下たゞ簡単に大略の常識的計算方法だけを示して置くことに止めようと思ふ。

(四) 單純平均と加重平均と云ふこと

物價指數とは要するに、選擇された基礎品目の各商品價格について基礎年月の價格と、比較し

ようとする年月の價格との比例（普通百分比例で時には千分比例を用ふるものもあることは前に述べた通りである）をとつて、その平均をとると云ふ事に他ならないのであるが、其平均のとり方には單純な平均をとる方法が六通り程ある、即ち（一）算術平均、（二）幾何平均、（三）調和平均、（四）中間數、（五）並數、（六）集約平均と呼ばれるものが、それである。しかしこれだけの中で一番普通に利用されてゐるものは最初の算術平均と幾何平均とであるから、これを説明することにする。

算術平均とはどう云ふものであるかと云ふと、各商品價格と基礎價格とを比例して出した各個の價格指數を合計して、其和を、商品數で割るのであつて $(P_0/P_0, P_1/P_0, \dots, P_n/P_0)$ ……基礎年度の商品價格、 $P_1/P_0, P_2/P_0, \dots, P_n/P_0$ ……比較される年度の商品價格、 N ……商品の數

$$\left(\frac{P_1}{P_0} + \frac{P_2}{P_0} + \frac{P_3}{P_0} + \dots + \frac{P_n}{P_0} \right) \div n$$

例を以て示すと、甲の商品が一單位十圓から三十圓になり、乙の商品が二十圓から十圓になつた場合に算術平均による物價指數はどうなるかと云ふと

$$\left(\frac{30}{10} + \frac{10}{20} \right) \div 2 = 175\%$$

即ち物價指數は百七十五となつて基礎指數百に對して、七割五分の騰貴と云ふことになるのである。

しからば今度は幾何平均と云ふのはどう云ふのかと云ふと、各商品の基礎商品價格との比例の積を商品總數で開いたものなのである。例によつて式で表はして見ると、

$$\sqrt[n]{\frac{P_1}{P_0} \times \frac{P_2}{P_0} \times \frac{P_3}{P_0} \times \dots}$$

となる。之を例で示せば甲商品が百圓から二百圓となり、乙商品が二十圓から十圓になつた

とすれば其幾何平均の指數は、

$$\sqrt[2]{\frac{200}{106} \times \frac{10}{20}} = 100\%$$

となつて即ち物價指數は百で、基礎指數と不變だと云ふことになるのである。

そこで此算術平均と幾何平均とはどちらの方が正確な指數が出るのであらうかと云ふと調査品目の數の少ない場合には算術平均の方が、指數の大きくなる傾向が著るしい。例をとつて見れば一番早くわかることで、今、甲の商品が百圓から百五十圓に騰り、乙の商品が百圓から二百圓に騰つた場合に、此兩方の平均法でどう云ふ物價指數が出て來るか調べて見ると、幾何平均でやれば

$$\sqrt[2]{\frac{150}{100} \times \frac{200}{100}} = 173\%$$

これを算術平均で算出すれば、

$$\left(\frac{150}{100} + \frac{200}{100}\right) \div 2 = 175\%$$

即ち算術平均の方が百分ノ二だけ指數が餘計に多くなるのである。かやうなわけで、算術平均の方は兎角、物價指數の騰落を不自然に多く算出するので、幾何平均の方が正確さに於て正しいと見る者が多く、猶其他にも學問的に研究して行くといろくの缺點が発見されるので、物價を研究する諸外國の學者も算術平均法は最も幼稚だと見る人が多いのである。尤もこの指數の差は獨り、算術平均と幾何平均との間だけに現はれるのではもとよりなく、他の四つの方法によつても何れも指數は多少づゝ違つてくるものなのである。

さて以上の計算方法は調査する商品の種類が何であらうとも、それを等しく一様の重大さをもつてゐる物として總平均の指數を出す物であるからこれを總稱して單純平均法と呼ぶのであ

る。しかし實際に各商品の重大さはそれごとく品目によつて非常な相違のある事はこゝに云ふまでもない。重要商品中の大宗である生絲や羽二重も、鯉節や、生魚なども一率一體の重要さで計算されて總平均指数が割り出されるのはどう考へても正しいものではなく、算術平均で行けば生絲、羽二重が一割價格指数が下つても、一方に鯉節や鮪が三割騰つたとすれば、其平均物價指数は二割騰つたと云ふことになつてしまふ。これでは本當に物價指數を經濟界のパロメータとして、商品市場の價格の標準と見做すことは出来ない。物價指數の算定には各商品の商品市場に於る重要さ、これを學問上の用語で云へば Weight を加へて測定しなければならぬと云ふ議論が出て來た。これを實際の運用から行くといろくろ商品に共通して居る重要さの標準、つまり、或る地方や或る期間に於ける其商品の生産高や取引の高、それに、消費價額等を調べて、それごとくに重要さの數字を求め、たとへば石油が商品市場で一の重要さがあれば、生絲は五十の重要さがあると云ふやうな計算を出し、この重要さを指數の計算中に加味して、

物價指數を出す方法を加重式平均法と云ふのである。此重要さの計算方法にもいろいろあつてそれごとくの商品の基礎價格を其まゝ Weight とするものもあれば、比較する年度の商品價格をとるものもあり、又是等の價格に、生産高や、取引高、消費量等に乗じて算出するものもある。

そこで此重要さの數字が出れば前に述べた六個の單純平均の算出法にそれごとく、此新しい要素としての數字を加算して、物價指數を出すことになるのである。尤も前にのべた第六の單純平均法には價格を乗じた計算法は無意味になつてくるので、これにはたとへ生産、取引、消費だけの重要さの數を出して計算を立てるの他はないのである。

例によつて此加重式による算術平均と幾何平均との出し方を公式で表はして見ると (WI, WII, WIII) は各商品の重要さを現はす數字、ΣW はWの數の總和)

加重式算術平均は

$$\frac{P^I w^I + P^{II} w^{II} + P^{III} w^{III} + \dots}{P_0^I + P_0^{II} + P_0^{III} + \dots}$$

$$w^I + w^{II} + w^{III} + \dots$$

加重式幾何平均は

$$\sum w \sqrt{\left(\frac{P^I}{P_0^I}\right)^{w^I} \left(\frac{P^{II}}{P_0^{II}}\right)^{w^{II}} \left(\frac{P^{III}}{P_0^{III}}\right)^{w^{III}} \dots}$$

これらの計算方法によつてそれごとく物價指數の數も相違してくるのは云ふまでもないことであるが、前に書いた單純平均の場合と結果に於てはほとんどの同様の差異が出てくるものなので徒らに讀者を混惑させることを恐れて、こゝには實例を擧げて計算式を示すことは止めて置くことにする。

(五) 完全無缺な計算法はまだ無い

私は今物價指數算定上に六個の基本になる可き單純平均法と、更に此六個の一つ一つに四個つの加重方法が加はつて行くことを述べたのであるが、かゝる種々の組合せ上、單純と加重との總てを通じて一體どれ程の物價指數計算法があるかと云へば、實に合計二十八通りの計算法を數へることが出来るのである。

この二十八通りの中で何が一番正確で完全無缺なものかと云ふことが出来るだらうか。近年物價指數の重要さが一般的に認められるに従つて各國の經濟學者中此方面を専攻する人々は非常な熱心を以て、指數計算法の完全を期さうと努力しつゞけて來た。中でも、フキツチャー教授などは此方面で最も重んぜられて居るだけに、研究に研究を重ねて來ては居るが、まだ完璧には遠い。

何でももの、正確、不正確をためすのにはそれを計る基礎的の尺度が必要であることは勿論のことであつて、物價指數の正確さを計る爲めにも同じ様な條件と尺度とが考へ出されてゐる。たとへば商品の單位を變へたが爲めに物價指數に變化を來すやうな事があつてはならないとか、基礎年度を變へたが爲めに物價指數に變化を來すやうな事があつてはならないとか、物價指數と等しい商品の價格指數が、加へられたり除かれたりした爲めに全體の物價指數に變化を來すやうなことがあつてはならないとか、其他いろ／＼の試験條件が考へ出され、近年フキツシャー教授などは更に新しい試験方法を考案してそれによつて完全な物價指數の計算法を求めようとして居る。

私はこれからさまざまの指數計算法について、それ／＼の試験に適合する部分と適合しない部分とを擧げて計算法の良否を検査すべき順序になつて來てゐる。けれども、それは非常に専門的なものとなつて一般人の理解に困難であるばかりでなく、良否をいろ／＼に検査して行く

と結局今日の所では、萬人が認めて何等缺點のない完全無缺な計算法は、まだないのだと云ふ結論に到達してしまふ他はないのである。それ故私は未決のものは未決のまゝとし、疑問は其まゝ疑問として残して於て、勞のみ多くして讀者の理解力を混惑せしめるやうな手段に出ることを止め、たゞ大體の根本傾向だけを示して置くに止めて見ようと思ふ。

第一に、單純計算と加重計算との間や、算術計算と幾何計算との間には明かに妙からぬ差異が物價指數の上に表はれてくるが、それが更に細くなつて近時經濟學者が算出し出すまゝの計算は差異があるにしても、それは極めて小さい差異であつて、大きな目で、物價の動きを眺める上から云へば、大體の流れの方向には決して誤りがないと云ふことが云へる。單純算術平均の計算法は一番幼稚なものとして一般に見做されては居るものゝ、商品市場で重要サの極めて少い、その辭價格變動の度合の恐ろしく激しい商品などは調査品目の中から除外して、極めてよく精選された調査品目だけを、出來るだけ澤山集めて、平均を求めれば其結果は決して幼稚

として葬り去る可きものではなく、複雑に面倒な計算をして出した物價指數とそれ程違つた比例にはならないとさへ云はれてゐる。第二に折角苦心して完全に近い物價指數を求めようとしても、元來商品の價格も實際の世間では千差萬別であり、重要サの計算方法から云つても生産にしろ、取引にしろ、消費にしろ、眞に完全を求めれば容易なことではなく、萬全を期すれば、計算の基礎となる材料を集めることが困難になつたり、計算式だけは出來上つても實際の役には立たない空想的の式が出來てしまつたりして實は何にもならない。しかも結果から云へば白が黒になると云ふやうな大きな指數の差異が生れてくる筈はなくて、大體の物價の流れはどれも違ひはないのだと云ふことになる。

かう考へ合せてくると、物價を研究するに當つてたゞ物價指數である最後の總平均指數だけに執着して、これを完全無缺なものにして唯一の守り本尊にしようと心掛けるのは今日の場合では寧ろ無駄なことではあるまいか。もとより總平均指數は物價の結論になる可きものである

から重要サに於ては最も重要なものであるには相違ないが、さればと云つて其指數が百分の二や三差異が出來たからと云つて、それだけに執着して論議をするにも當らない。同時に又この細い比例に於て不確な指數だけを目標にして實際の經濟社會の諸政策を細く律しようとするのも誤を生じ易い危険なことである。それ故讀者諸君は物價指數を見るに當つても大きな物價の流れと云ふことは、動かぬ標準として常に注目されると共に、極細い比例の末までも正確動かす可からざるものと信じて物事を考へられたいやうにして戴きたいと思ふ。

最後に、全商品に亘る廣い範圍の物價總平均指數は今云つたやうに完全無缺と云ふことは期し難いものであるから、此總平均の本になつてゐる各個の商品の價格指數に就て充分の注意を拂ふことが必要である。何故ならば總平均だけの指數を比較して物價を論ずる危険率よりも、各個の商品の價格指數について其關係を見る方が、正確さに於ても、實際に利用し得る點に於ても遙かに危険率が少いからである。

猶、物價指數に關して深く研究する熱心と興味とを持たれる讀者は左の典型的の數種の著書を一讀されることを希望する。

“Purchasing Power of Money”

By Irving Fisher.

“Making of Index Numbers”

By the same author.

“Problem of Estimation,”

By O. M. Walsh.

“The Measurement of Changes of The General Price Level.”

By Allyn Young.

“Economics of Welfare” By Pigou.

尙 “A Tract on Monetary Reform” By T. M. Keynes. 1923 も好參考書として、推す可きものであらう。

(六) 我國現在の代表的物價調

我國の物價調査は随分古くから行はれて居つて農商務省の調査などは明治十七年から引續いて今日に及んで居る有様であるが、それが一般的に注目をひき、従つて指數の計算法其他に一段の進歩を遂げるやうになつたのは歐洲大戰以後の事である。讀者諸君が、物價指數の實際について研究せらるゝ便宜の爲めに、現在我國に行はれて居る公私の物價調査の中、代表的なるものゝ概要を記して見ることとする。

(イ) 日本銀行の物價調査

日本銀行の物價調査は調査機關が權威と信用とを兼ね有して居るだけに、其發表する物價指數は殆ど代表的のものとして一般から見られ、新聞、雑誌を初めとして、外國で我國の物價を比較研究するやうな場合にも、其指數が引用されて居る有様である。

同行の物價調査は、一ヶ月一回の調査であつて東京物價調(卸賣物價調)と東京小賣相場調との二種がある。

東京物價調の方は明治三十三年十月の相場を基礎價格として百とし、それから毎月の東京市中の平均卸し相場を調査發表するものであつて、品目は左の五十六種である。

米、大麥、裸麥、小麥、大豆、小豆、小麥粉、肥料糠、魚肥、油粕、砂糖、製茶、鹽、味噌、醬油、日本酒、鯉節、鶏卵、油、刻菘、西洋菘、生絲、羽二重、絹手巾、甲斐絹、絹裏

地 眞綿、綿糸、白木綿、金巾、線綿、麻、フランネル、毛斯綸、毛織子、藍、木材、洋鐵
銅、石材、煉瓦、瓦、セメント、疊表、板硝子、日本紙、洋紙、生漆、木蠟、皮革、燐寸、
石炭、石油、炭、薪、

猶この品目は大きな品目であつて、各品目は一つの銘柄を以て代表させたものもあれば、數種又は十種以上の銘柄について價格を調べて居るものもあるので、銘柄から計算をすれば調査の品數はもつと非常に澤山になることは云ふまでもない。日本銀行は此物價指數發表と共に、十ヶ年間の總平均指數の毎月の對數表と主要商品指數の最近一ヶ年間の毎月對照表と、並に大四年以來の東京、倫敦、紐育、巴里等の代表的指數を列記して内外物價指數の對照表をも掲げて世界的物價調査の便に供してゐる。此内紐育はブラッド・ストリート社、倫敦はエコノミスト社、巴里は一般統計局調査の指數を採用してゐる。

東京小賣相場調の方は大正三年七月の價格を基準として百とし、調査品目は食料品四十二、

燃料燈火六、服飾用品二十、其他三十二、合計百品目に互るものであつて、個々の品目は本章の第二節、「物價指數を求める順序」の中に見本として掲げてある表について見られたい。尙此調査には最近二箇年間の東京小賣相場類別對照表をも加へて發表してゐる。

總てこれらの東京物價にしる、東京小賣相場にしる、日本銀行ではそれらの物價指數の出し方は單純算術平均法を用ひてゐる。

(口)東京商業會議所物價調査

東京商業會議所の物價調査には卸し賣物價調と日用品小賣物價調との二種類がある。同所の調査は可也古くから行はれて居て、沿革變遷があつたがそれは次に農商務省の物價調査の中に述べることにして、現在行はれて居るものを述べて見ると東京市卸賣物價調の方は毎月一回の調査で大正九年下半期を基準として居る。調査品目は七大別として合計八十一品、品目を擧げると

次の通りである。

- 穀類及蔬菜——玄米(上)同(中)同(下)大麥、裸麥、小麥、大豆、小豆、長鶉青、麥
- 豌豆、小麥粉、澱粉、甘藷、馬鈴薯、
- 飲料及調味料——清酒、醬油、味噌、食鹽、鯉節、精製糖、分蜜糖、茶、刻煙草、
- 肉類及魚類——牛肉、豚肉、鶏、鶏卵、牛乳、鮪、鱈、鯛、鯖、鹽鮭、
- 衣料品——線綿、綿糸、大麻、銘仙、羽二重、縞木綿、晒木綿、白モスリン、羅紗、
- 建築材料品——石炭、セメント、普通煉瓦、屋根瓦、鉄鐵、丸鐵、平鐵、角鐵、鋼板、電氣鋼、
- 亞鉛鑛板、錫力板、丸釘、角材(杉)同(檜)板(松六分)同(杉四分)丸太(松)同(杉)苦銅、
- 肥料及飼料——過磷酸石炭、硫酸安母尼、硝酸曹達、干砂、絹搾槽、菜種油槽、入豆油槽、
- 纖維——石油、石炭、薪、炭、菜種油、大豆油、印刷料紙、半紙、燐寸、疊表、牛革、

會議所で發表する是等の品目は一々其銘柄、例へば小麥であれば竹印であるとか、分蜜糖ならばM・S・SのIIIとか云ふ様な風に標準品の名を列記して更に各月共に其前月の物價指數を百とした比例の指數と、大正九年下半年期を百とした指數との比例指數との二つを掲げて居るのである。

同所の東京市日用品小賣物價調の方は毎月二回、即ち一日、十五日の兩度に調査して發表するもので調査品目は穀菽及蔬菜類、嗜好品及調味料、肉類及魚類、雜食料品、衣料品、雜品、の六大目の下に四十七品目に互つてゐる、品目を舉げて見ると左の如くである。

穀菽及蔬菜類——白米（一等）同（二第）同（三等）糯米、改良麥、大豆、小豆、玉葱、馬鈴薯、麥粉、

嗜好品及調味料——茶、味噌、醬油、食鹽、精酒、麥酒、砂糖、鯉節、

肉類及魚類——牛肉（内地）同（青島）豚肉、鶏肉、鹽鮭、鶏卵、牛乳、煉乳、

雜食料品——椎茸、干瓢、梅干、澤庵、鰻鮓、高野豆腐、豆腐、

衣料品——晒木綿、金巾裏地、モスリン、白縮緬、綿縫糸、綿、足袋（木綿）

雜品——木炭（土釜）同（堅炭）薪、コークス、石鹼、燐寸、半紙、

是等の日用品物價調は卸賣物價調のやうに大正九年下半年期を基準として指數を求め、これを前年の五月十五日の調べからは同年五月一日と四月二十五日を百とした比較物價指數と其前年の五月十五日を百とした比較物價指數との三つを舉げて居るのである。

それ故此物價指數では戦前と較べて何程の騰貴になつたであらうとか、三年前に較べて物價はどうかつたかと云ふやうなことを見るのには甚だ不便極まりなきものであるけれども、其代りに短い前即ち前旬はどうなつてゐたか、前月とはどう違ふか、前年の同旬とはどうなつてゐたかと云ふやうなことが極めてはつきりと解るわけなのである。かゝる調査は理論よりも寧ろ實際上の必要の度合を重く見て試みたものに相違ないのである。計算はどれも單純算術平均法

である。

(ハ)大阪商業會議所其他の物價調査

商業會議所は獨東京だけでなく全國都市の商業會議所では何れも物價調査を試みて居るが其方法は計算法から云へば何れも算術平均法でたゞ其品目の選り方だけがそれ〴〵に大同小異であるに止まつて居る。其一例として代表的に大阪商業會議所の物價調査を擧げて見ると、ここでは卸賣物價調と、日用品物價調との二つの調査を毎月發表してゐる。卸賣物價調の方は品目に於て東京商業會議所よりも多くを採用してゐるが、矢張月一回の調査で著しい相違も認められないが小賣物價調の方は可也著しい調査方法の相違を示して居るので、茲にその大要を述べて見ることにする。

大阪市日用品物價調は大阪商業會議所と大阪府商務課、大阪市役所商工課との聯合調査にな

つてゐて、大正十年一月十七日の相場を基準として指數百にして居る。そして調査は毎月、二日、十六日の二回の現在調となつてゐて調査品目は左の六十種を含んでゐる。

白米(内地特等、同上白、鮮米一等)糯米、平麥、金時、青豌豆、鶴子大豆、大納言、北海道大豆、砂糖(S R O B B T A B)味噌、清酒、麥酒、醬油(龜甲萬、小豆島産上物)高野豆腐、干瓢、椎茸、素麵、鶏卵(地玉、三洲、天津)澤庵(東京、伊勢)梅干、牛肉(口ス、上等)豚肉、鶏肉、牛乳、食鹽、鰻鮓、鯉節(土佐本節上、鰻節上)紅鮭、身欠鰯、雑子、鯛、木炭、薪、午券、玉葱、馬鈴薯、甘藷、茶(煎茶中、川柳上)燐寸、半紙塵紙、晒木綿、綿縫糸、綿、モスリン、足袋、靴下、石鹼、タオル、

括弧の中のもの以上二つ以上の調査銘柄をもつものである。

而してこの調査の特長は各品目についてそれ〴〵卸し、小賣の相場を對照せしめた點にあつて、大正十年一月十七日を基準とした比較指數と前回即ち二日の調査ならば前月十六日の、相

場との比較指數とを擧げて居る。價格の區別から云ふと、それぐの品目について卸し賣價格、公設市場小賣價格、市内普通小賣價格の三つに分類して、一々の指數を出し、基礎指數と前回指數との増減比較を擧げて居るのである。同調査が單に市中の小賣相場だけでなく、公設市場相場と卸し賣相場とを比較對照せしめて居る所は可也に面白いことであると思ふ。

(二) 農商務省の物價調査

これまで擧げたものは何れも一都市だけの物價調査であるが、農商務省の發表する物價調査は全國的に亙つて極めて廣汎な、日本と云ふものゝ物價を代表したものを表さうと試みられて居る所に特長をもつてゐる。

農商務省の物價調査は其沿革から云ふと非常に古いものであつて、明治十七年に全國三十一府縣の府縣廳に命じて當時代表的の商品と認めた二十五品目についての價格の報告を徴して、本

省で統一して一つの統計を作り出したのに初まつてゐる。尤もこれは三十一府縣と云つても其調査の場所は一府縣で代表的の一都市の相場を取つたものもあれば、四個以上の都市のものを集めた府縣もあるもので、總數から云ふと随分廣い範圍に亙つたものであつた。元より其當時は指數などはなく、たゞ代表商品の價格の變動を比較するに止まつて居た。

此調査は可也永く繼續されて居つたのであつたが、府縣廳の調査はどうも不完全と便宜を缺く點が多いので、明治三十二年に方法を一變して府縣廳への命令を廢して新に二十六都市の商業會議所に命じて代表商品價格の報告を毎月徴することになつた。そして今度のものはやゝ内容も改まつて明治三十三年から開始され、同年一ケ年の平均價格を基準として百と定め、これに依つて爾後の物價指數を算出することになつた。算出方法は單純算術平均法によつたものである。ところが此調査を續けて行つて見ると、調査品目は總計で五十二品目であつたが、其中には重要商品として缺くことの出来ない筈の羽二重、銅、毛織物のやゝなものが入つて居らな

いので標準卸し賣物價として不完全であるとの議論が多くなり、それが動機となつて物價調査變更が計畫され、それまでの調査方法は、大正八年五月限り中止されて新に大正九年七月から調査品目を八十七品に改正し、調査機關も従來の二十六商業會議所を半減して十三都市とし、前項商業會議所の中で述べたやうな形式で報告を徴することになつた。十三商業會議所の所在地は東京、大阪、神戸、京都、横濱、名古屋、廣島、金澤、仙臺、小樽、福岡、新潟、高知の諸都市である。

比較指數は何れも前月を基準百として出したもので毎月一回發表し、品目の大別は七分類であるが、念の爲め細目を記すと次の通りである。

- 穀菽及蔬菜類、——立米(上)同(中)同(下)、白米、蘭貢米、西貢米、朝鮮米、臺灣米
- 大麥、裸麥、小麥、大豆、菜豆、豌豆、小麥粉、澱粉、甘藷、馬鈴薯、
- 飲料及調味料、——清酒、醬油、味噌、食鹽、鯉節、白砂糖、分蜜糖、茶、刻煙草、

- 肉類及魚類、——牛肉、豚肉、生鶏、牛乳、生鯛、生鮪、生鮒、生鮓、鹽鮓、
- 衣料品、——線綿、綿絲、生絲、大麻、太織銘仙、羽二重、縮木綿、晒木綿、白モスリン、羅紗、

建築材料品、——石灰、セメント、煉瓦、瓦、鉄鐵、丸鐵、平鐵、角鐵、銅板、電氣銅、亞鉛鑛板、鐵力板、丸釘、杉角材、扁柏角材、松板、杉板、松丸太、杉丸太、告竹、肥料及飼料、——過燐酸石灰、硫酸安母尼、知利硝石、干鰯、鱈、搾粕、大豆油粕、麩、其他、——石油、石炭、薪、木炭、菜種油、大豆油、西洋紙、半紙、燐寸、疊表、以上の品目によつて物價調査を試みて來たのであるが、要するにこれは商業會議所の調査をもとにしたものであつて、指數の計算がたと前月との比較に止まつて、大勢の流れを見ること不便なものと、更に品目の整理を爲さねばならぬ必要とに迫られて農商務省は再度物價調査の内容を變更することに決定し、これまでの調査は大正十二年十二月限り中止することにした。

そして今度新に作製するものは、大正十、十一、十二の三ヶ年の平均物價指數を基準百として比例の基礎とし、品目も従來の生魚などは價格の騰落が甚だしくして、爲めに全體の總平均の指數に大影響を及ぼして來るので、これらを考量して品目の大整理を試むることになつたのである。たゞ其計算方法は加重式でなく、依然として單純算術平均法を採用することとした。

(ホ) 社會局の物價調査

以上の諸物價調査は何れも卸賣物價又は市中の小賣相場を主としたものであるが、近時最も長足の進歩をしたものは公私の市場であつて、生活問題に最も緊密な日用品を取扱ふものとしては此公私設市場の相場を度外視することは出來ない。それは普通商人から日用品を買ふよりも、市場で求める方がどうしても安いやうに出來て居るので、近頃は一般市民の市場利用は可成りに進んで來て居る。そこで社會局では國民生活に最も深い關係を持ち且つ生活必需品物價

を左右せんとする此市場相場なるものを調査し、(私設市場相場は別にする) 大正十二年の一月から全國公設市場小賣物價調なるものを開始するやうになつたのである。

社會局の公設市場相場の調査は二つに分れて居て、一つは毎月一回の調査、一つは年毎の調査となつて居るので、年毎の調査は指數を出して總平均をも發表するので、完全な物價調と見ることが出来るが、毎月一回發表するものは指數を出さず、單に小賣品の價格だけの變動を忠實に示して居るので、物價調査ではなしに價格調査と稱す可きものである。しかし乍ら其調査品目の豊富な點から見ても、場所が全國的な點から見ても貴重なる材料であることは勿論なので、敢て其大要を記して置くことにする。

社會局で發表する小賣價格統計は毎月十五日現在で全國主要都市三十五箇所を選びその公設市場での相場を調査するもので、品目は八十一であるが、各銘柄によつてこれを分ければ百四十となる。標準は中等品で食料品が品目中の殆ど全部なので、云ひかへればこの價格調査は

日用食糧品價格調査とも見る可きものである。

統計上の大別による品目は左の通りである。

白米、麥、

大豆、小豆、豌豆、菜豆（隱元）、大角豆、

蠶豆、干瓢、椎茸、高野豆腐、麩、寒天、白玉粉、小麥粉、蕎麥粉、

乾海苔、昆布、乾鰹鮓、素麵、茶、鹽鮭、鹽鱒、無頭開鱈、

干鰯、煮干、シラス、鰹節、鱒目刺、澤庵、奈良漬、味噌漬、梅干、

ラツキヨウ、佃煮、煮豆、罐詰、

肉罐詰、牛肉、豚肉、

鶏肉、鶏卵、味噌、醬油、砂糖、清酒、

麥酒、豆腐、蒟蒻、油揚、竹輪、蒲鉾、木炭、炭團、

薪、大根、胡蘿蔔、午莠、蓮根、里芋、葱、玉葱、甘藷、馬鈴薯、玉菜、白菜、南瓜、白瓜、

胡瓜、茄子、

秋刀魚、鰯、鯖、鰯、鱒、鮒、鮓、鮓、鮓、鮓、

是等の價格を調査する全國の都市から云ふと、

關東區——東京、橫濱、橫須賀、前橋、

近畿區——京都、大阪、神戸、尼ヶ崎、

中部區——名古屋、静岡、松本、濱松、

北陸區——富山、福井、

中國區——岡山、廣島、吳、松江、

四國區——高松、松山、高知、

九州區——門司、福岡、久留米、長崎、大牟田、熊本、鹿兒島、

東北區——仙臺、福島、青森、秋田、
北海道——札幌、小樽、函館、

全國公設市場小賣物價指數調の方は年一回の調査であつて、地方は前のものと同様であるが品目は穀類、乾物類、鹽乾魚類、漬物類、佃煮及煮豆類、罐詰類、肉類、調味品類、嗜好品類、其他食料品、薪炭類の大別の下に五十五種の品目を集め、大部分は食料品であることは同様である。この物價指數は其年の一月の價格を基準百として計算したもので單純算術平均法によるものである。

(八) 東洋經濟新報とダイヤモンド社の物價調査

これまで述べ來たつた各種の物價調査は、政府又は公共團體法人等の機關の手になるものであるが、雜誌社の如き私的機關に於ても、可成りに尊重す可き調査を試みて居るものが少くない

い。其代表的なものとして擧ぐ可きは、東洋經濟新報社とダイヤモンド社のものなどが、それである。

東洋經濟新報社の物價指數は可成りに古くから行はれて居つて、明治三十四年以來發表されて居るが、其内容は幾度も改められ、現在では穀類、其他食料品、織物及同原料、金屬雜品等の大分類の下に總計九十三の品目を網羅し、大正二年一月の商品價格を基準百として爾後の物價指數の基として居る。此計算方法は單純算術計算法である。

ダイヤモンド社の物價調査はこれまで述べ來たつた諸指數の計算法が何れも算術平均法を以て算出して居るのとは非常に趣きを異にして加重式幾何平均法を用ひてゐる。この計算法は大正十二年五月から發表し出したもので、大正元年八月から三年七月までの平均物價を基準百として計算し品目は、食料及嗜好品、被服地、建築材料、金屬類、工業藥品、工業雜品、燃料、肥料等で、合計八十三品目であるが、これに銘柄によるものを加へれば百十四品目となる。

ダイヤモンド社の物價指數が加重式幾何平均であることに於て他に相違して居るばかりではなく、單に總指數の比較の他に、輸入品と輸出品とに分類した指數や、原料品、生産財、消費財等に分類した指數をも調査して發表して居る。

加重式計算法に就ては前に其大體を述べて置いた通りであるが、所謂 Weight 即ち商品の重要さを現はす爲めには、ダイヤモンド社は正確な政府統計調査によつて、大正元年から大正九年迄の生産價格と輸入價格の和の平均を各商品について算出して之にあてゝ居る。しかし商品によつて是等の算出の基礎となる可き統計の缺けて居るもの其他については適當の推算を爲してこれに充當して居る。

(七) 諸外國の物價調査

物價による經濟界の消長を實際に比較し利用しようとするれば、單に日本だけでなく、諸外國

の物價の流れをも同時に研究する必要が出来てくる、其意味に於て外國の物價調査が如何に行はれて居るかを知らることは極めて大切なのであるが、其一つ一つについて我國の物價調査のやうな解説を加へることは、こゝでは不可能なので、たゞ簡単に諸外國の代表的物價調査機關の名を擧げて置くに止めやう。

英國にはエコノミスト誌、ステーチスト誌の調査と、商務省、労働省の發表するものが代表的に尊重されて居る。米國ではブラッドストリート誌のもの、聯邦準備局のものが代表的のものとなつて居るが、其他にも數は多く、物價問題の權威であるフキツシャー教授などは、毎週自分の調査した物價指數を公表して居る。加奈陀では政府の労働省、獨逸ではフランクフルテル、ツアイツング紙のものが最も重んぜられ、政府も亦標準指數を發表して居る。佛蘭西ではスタチスチツク、ゼネラル、伊太利ではバツチ教授の調査指數、瑞典ではローレンツ教授の指數、瑞西では瑞西財政日報、諾威では經濟評論、和蘭では統計局、支那では上海の財

政部駐滬調査や上海商業會議所の者が標準的のものとして一般に採用されて居るやうである。猶是等の指數調査は何れもそれ／＼自分の調査に都合のよい基準年月を以て調査を行つて居るものが多いので、これを世界的に比較する場合には單位の統一が非常に困難であるので、米國の聯邦準備局では特にこれを統一して世界的に物價指數の比較を容易ならしめる目的から、國際比較用各國物價指數なるものを特に發表して居る。既に前數節に述べて置いた所によつて眞に統一ある誤りの少い世界的物價比較と云ふことがいかに困難で、否寧ろ不可能であるかは讀者は既に承知せられて居ることと思ふが、此準備局の發表する所のものは、他の無責任なる、どんな數字でも世界的に配列して直に其騰落を云々しようといふやうな人々のものに較べれば、手數の掛つて居るだけに、最も信頼するに近いものと云ふことが出來、これで物價の世界的潮流の大體だけは窺ふに足るものがあるのである。

第二章 物價は如何にして動くか

(一) 二方面から見た動き方

物價は如何にして騰り、如何にして下るか。と云ふ原因はこれを二つの方面から觀察するの
が當を得て居るものとすることが出来る。それは個々の商品の價格を騰落せしむる原因と總て
の商品に一樣に作用する一般的原因との二つがそれである。

一般的騰落の原因と云ふのは個々の商品それ／＼によつて特殊の關係を持つものでなく、ど
の商品にも一樣に作用するものであつて商品の價格の尺度となる通貨、並びに今日では通貨と
同様に交換の媒介物になつて居る小切手とか手形とか云ふやうな信用證券の消長を指すもので
ある。

かゝる一般的原因以外の騰落の原因はそれ／＼の商品に就て左右するものであつて事情によつていろいろ其原因を異にしてゐる。元來物價とは既に第一章に於て述べて置いた通りに商品價格を綜合的に見た動きを云ふのであるから、個々の商品の價格の變動を直ちに物價そのもの騰落と見るのは間違つて居る。物價が騰つた時にも個々の商品について云へば下つたものも當然有れば、物價が下つてゐるのに反對に騰貴して居る商品もあるのである。それ故たゞ簡單に考へれば個々の商品の騰落は必ずしも、物價騰落の原因とはならない。寧ろ其反對になる場合も多いのだと云ふことも出来やう。

然し乍ら物價と個々の商品の價格とは別々に考へるのが本當ではあつても、一步内容的に觀察すれば物價は結局、商品の價格の騰落と切放して考へることの出来ないのは常識を以てしても明らかなことである。もとより物價の騰落とまるで反對に動く個々の商品のあるのは否めな
いが、總括的に見れば、多數の商品の價格が騰れば物價は當然騰るのであつて、もう少し専門

的に云へば、重要な商品の價格が騰つた時には物價も亦騰るので、いかなる場合でも多數の重要商品が騰つて物價が下ると云ふ計算の出る筈がないのである。そこでやゝ廣い目で見れば、物價は結局、個々商品の動き方を現はしたものに等しくなる。多くの場合、物價が上騰しつゞけて行く場合には、總ての商品が矢張り、いつのまにか同じ流れ方をするもので、どこまでも物價騰貴の大勢に反して、下落しつゞけて行くと云ふやうな商品は余程特殊なものに限つてゐるのである。云ひ換へて見れば、個々の商品の騰落の原因も通貨關係のやうに一般的でないにしても、矢張り大體共通的影響をもつ原因を多く有するものだと云ふことがわかるのである。此意味に於て商品價格騰落の原因も物價騰落の研究上重要なものと云はなければならぬ。

以下、商品價格の騰落の原因から一般的原因までを節を分つて述べることにする。

(二) 需給關係と効用

商品の価格を左右する原因はそれづくに特殊なものまでを挙げれば随分澤山を算へることが出来るけれども、原則的のものを数へると第一に効用の變化に伴ふもの、第二に需要供給の關係によるもの、第三に生産費の消長によるものとの三原因に歸着する。

第一の効用の變化と云ふのは加工されたり形状を變へたりすることによつて商品の價値が變化することを云ふ。學問的に云ふと効用價値の變化によつて價格に變動を來す、解り易く云へば、値打が違つて來るので、その値段まで變つてくると云ふことなのである。たとへば綿絲であつては糸だけにしか使へないものが、これを紡織機にかけて綿織物にすれば、それだけ使ひ道が便利になつて値打が違つてくるので、従つて價格が上騰してくる。此綿織物に更に捺染をしたり、色をつけたりして、反物に仕立て上げれば、更にそれだけ効用が増してくるので、價格も更に上騰してくると云ふわけになる。かやうに粗製品からだんくんに精製品になつてくる爲めに生ずる價格の變化ばかりではなく、東京や大阪の市街自動車などはたゞ普通の坐席だけ

しかないが、あれに加工して倫敦あたりの市中を走るやうな屋根にまで腰掛をつけて客の乗れるやうにでもすれば、それだけ乗客を多數に收容することが出來て効用は増大するので、従つて價格も高くなつてくると云ふやうなわけである。發明品などでは一寸した加工や工夫によつて、其ものゝ効用價値が著るしく増大して値段が高くなり、發明者に非常な利益を與へると云ふやうなことはよくあることである。

總てかやうな効用の變化から來る價格の變化は價格の動く原因中でも最も單純なものであるが、第二の供給の關係によるものは、少しく複雑になつて來る。商品の需要供給と云ふのは、生産者又は販賣者對消費者の關係であつて需要と云ふのは商品を買はうとする數量で、供給と云ふのは之に對して商品を賣らうとする數量であるが、こゝに最も重大なのは其賣買に對して支拂はれる交換媒介物即ち貨幣の額の如何と云ふことである。供給と云ふ方面から云へばこれは數に自ら限りがある、自動車なら自動車を商品として市場に出し得る數量は、つまり供給は

一定して居つて減れば減る、増せば増すで數量を以て現はすことが出来る。しかし需要と云ふ方面から行くと、たゞ自動車が増えたいと云ふ人の數で勘定すれば、或は勘定が出来かねる程多いかも知れない。今日文明の世の中に生れて自動車が欲しくないものは或は一人もないかも知れない。それ故、たゞ單に自動車がほしいと云ふ慾望だけを標準にして其數量を需要と見ては需給によつて動く價格の原因に算へることは出来ない。どうしてもこゝにさう云ふ慾望を持つてゐる人が、其品物に對して支拂はふとする交換媒介物即ち貨幣が入つて來る必要がある。即ちフォードならフォードを一臺二千圓なら買ひたいと云ふ人の數を需要と見る他はない。これに對して供給の方も矢張り同じで、たゞ單に商品として市場に提供せられて居る數量だけではなく、いくらならば賣つてもよいと云ふ貨幣價值を加へたものでなければならぬのである。以上の事を綜合して云へば商品の需給關係と云ふのは、或る値段で賣らるゝと云ふ商品の數量と、或る値段でなら買はうと云ふ商品の數量との關係を云ふものであるとすることが肝腎な

のである。

そこでかゝる需給の關係によつて商品の價格がいかにか動くかと云ふと、商品の需要が増して供給の方の數量が増さなかつたり、又は減じたりした場合には價格は騰り、供給の方が多くなつて、需要が依然として元のまゝであつたり、又は減じたりする場合には商品の價格は下ることになるのである。

歐洲戰爭の當時日本には所謂船成金なるものが神戸を中心にして無暗に澤山出來た事がある。これは何の爲めかと云へば戰爭のお蔭で船腹が世界的に不足し、一方、どうしても必要に迫られて需要の方が益々増加したので、其間にあつて巧みに利益を収めた船主が多かつたからである。即ち航海には獨逸潛行艇の危険があつて、撃沈數も尠くなく、造船所は夜を日について船舶の建造に盡しても自ら產出には限りがあり、供給が尠ないのに對して、戰爭の進むに従つて軍需品其他の輸送に船腹の需要は急速度に増大する一方なので、需給の關係で船價も備船料も

途方もなく騰貴する一方で、平常ならば噸當り六十圓か七十圓位にしか賣れぬ船が、一躍して七百圓にも八百圓にもなつたのであるから船主の利益は莫大なもので、内田汽船會社が六十割の配當をしたと云ふやうなレコード破りの突飛な話まで聞かれるやうになつたのである。これは全く需給關係が價格を左右した好箇の實例だと云つてよからう。

それが戰爭が終熄すると、今度は戰爭中に増へた船舶は依然として元のまゝであるのに、經濟界には非道い不景氣が襲つて來て荷動きは激減し、船舶の需要は一時に減つてしまつた。しかし供給の方は依然として元のまゝであるので當然の結果として今度は船價も船料も運賃も大暴落を來すやうになり、どうにも始末がつかなくなつた揚句、大正十三年の春には神戸の社外船主が集まつて繁船を暗けての運賃同盟を計畫して、僅かに餘命を保たうと企てた程の悲慘な状態に陥つてしまつた。この船成金の續出も凋落も、要するに需給關係から生れた悲劇喜劇の一齣なのである。

商品の價格が需供給の過不足によつて高低することは以上の通りであるが、此騰落は普通の場合さう際限もなく續くものではなくて、そこに一定の限度と云ふものがあるのである。今述べた歐洲大戰中の船舶界の例などは特異なものであつて、いかに供給不足だと云つても價格が十倍にも二十倍にも騰つてそれが三年五年と騰り續けて止まないなどは平時普通の場合にはまづ見られない所である。普通に云へば供給が非常に不足して價格が騰貴しつゞけて行けば、ある限度を境にして需要は減退し、同時に供給が増加して價格は低下して來るし、需要が非常に減退して價格が低落すれば矢張りある限度を境にして供給が制限されて價格は自然に引戻されてくるのである。かくして原則から云へば商品の價格は自然的にある基礎價格を中心にして上つたり、下つたりすることになるものである、然らば此基礎價格になるものは何かと云へば、それは生産費であつて、これについては更に項を改めて述べることにする。

(三) 需給を自然的に調節する生産費並に基礎價格と云ふもの

商品の價格が需要供給の變化によつて高低を來すと云ふことは前に述べた通りであるが、その騰落は決して無制限に行はれるものではなくして自然的に調節されて最後にはある基礎價格に近い所まで戻つてくるものである。此基礎價格と云ふのは生産費に他ならないのであつて、廣く長い目で見れば、價格の騰落は何れも此生産費を中心に波が寄せては返し、返しては寄せらるやうに動きつゞけて居るものなのである。たゞ此生産費を中心に自然的調節の行はれるのは、競争市場に立つて居るものや、再生産の出來るものに限られて居るので、獨占市場のものや、再生産の出來難いものなどには適用されないのである。此獨占された商品については後に又述べることにする。

さて再生産が可能で競争市場にある商品が非常に値段が動いた場合にどうなるかと云ふと、

まづ供給の方面から云へば、ある商品が供給不足で生産費以上に非常に利益のあるやうな價格になつたとすれば、必ず競争者が現はれて生産高が増加し、價格がだん／＼に引下げられて行く。震災の當時、初めてすいとんやでも出したものは、何分にも供給不足の所へ需要するものは澤山あるので、面白いやうに賣れて、しかも随分うまい儲けがあつた。しかし儲かるとなるとすぐに眞似する者が出來て値段をいくらか引下げて賣る。それでもまだ儲かるとなると今度は無暗にすいとん屋が澤山出來てくるので供給がずつとふえて、餘りうまい儲けはなく結局、生産費の近くまで値段が下落してきて落付くのである。

今度はそれから反對に供給が過剩になつて價格が非常に下落したと假定する。それも生産費とかつ／＼位の下りやうならば競争上いろ／＼の原因も作用して大なる變化を見ないこともあるが、生産費以下に價格が暴落するやうになれば、生産を續けるものがだん／＼に減少して供給は自然的に減じ、價格は再び生産費を中心に引戻して来る。

以上は供給の方面からの観察であるが、需要の方から見ても矢張り此自然的の調節が行はれる。即ち需要が非常に殖えて供給が間に合はず、價格が續騰して行くとするれば、ある程度の騰貴までは需要は依然として續くけれども非常に騰貴すれば最早、購買力の方が追付かなくなつて、需要者の数は自然的に淘汰され、供給の關係は再び元に戻つてくる。需要が減退して價格の下つた時にも同様で、生産費以下に商品が低落するとすれば、誰しも非常に安いから普通の値段ならば買はない者までがそれに引付けられて買つてくるので、需要は自然的に増加し、價格は又騰つてくるのである。

かやうに需要の方面から見ても亦、供給の方面から見ても際限なしに騰り又下ると云ふことはなくて、長い時間を通じて観察すれば、供給による變動はいつも或一定の點を中心として自然的に調節されて居るものなることが分る。此中心點を爲すものが生産費であつて、これを基礎價格又は平準價格と云ふのである。マルクスが生産價格とか商品價格とか稱したのは即ち此

基礎價格をさして云つたものなのである。

然らば此需要供給の自然調節の中心となる生産費とは何であるかと云へば、それは單に其商品直接生産するに要する費用、例へば労働賃銀であるとか資本に對する利子であるとか利潤であるとか云ふやうなもの、他に、其商品を市場に出して消費者の手に渡すやうになるまでの一切の費用例へば荷造りの費用、廣告費、倉敷保険料とか其他さまざまの經費をこめたものを云ふのである。つまり是等總てのものを支辨し得なければ、生産者側から云へば結局其取引は缺損となつてくるので最早其上の生産をしないやうになつてくるし、これを支辨し得て更に莫大の利益があるとすれば、他の競争者が、競つて生産を開始し、こゝに供給の自然關係が行はれると云ふ段取になるのである。

以上述べ來つた所によつて生産費が商品の價格の動きの上にかなる役目を演じて居るかの大體を知り得るのであるが、こゝに問題となつて來るのは其生産費なるものがそれ／＼の生産

者によつて一々に異つて居るから一體どの生産費が所謂基礎価格となるのであるかと云ふことである。たとへばこゝにある商品の生産者が三人あつたとして甲の生産費は一圓であり、乙は一圓五十錢、丙は一圓八十錢を要するものとする。この場合にどれが基礎価格となるのかと云ふと最低生産費を一圓とすれば乙と丙とは生産費以下になるので最早生産し得ないことになつて供給は減少し需要に應ずることが出來ず、甲が獨占的に一手に全社會の需要に應ずるだけの能力のない限りは、結局需給關係から見て社會に不利不便を與へ、聽て價格の上騰を來して再び乙丙を加入させることになる。もし又乙の生産費一圓五十錢をとれば甲と乙とは生産を続けられるが、丙は生産を中止してやはり供給不足に陥つてしまふ。中庸をとつて甲乙丙三者の平均生産費一圓四十錢強を以て基礎生産費と見做せば矢張り第一の場合と同じやうに乙丙の兩人は引合はなくなつて生産を中止せねばならなくなつてしまふ。それ故基礎生産費としてはどうしても其時の最高である丙の一圓八十錢をとる他はなくて、甲乙はそれだけ餘分の利益をうけ

て商賣が行れると云ふことになるのである。

かうしてある一定の時の基礎生産費を求めれば常に最高生産費と云ふことになるのであるが、然し一般の産業界にあつては世の進むに従つて此生産費は常に最低生産費に近づき進みつつあるものだと言つてよい。前の例で云へば其時の基礎生産費は丙の一圓八十錢であるが、競争が盛んになり、勞働能率の研究が進み、機械の利用が益々巧妙になるにつれて必ず一圓七十錢なり一圓六十錢なりで丙より安い生産をするものが出來て、全體の供給力には何等の支障無しに、丙は淘汰されて、今度は新一圓六十錢又は七十錢の基礎価格に變つてくる。聽てこれが又淘汰されてつきつに基礎生産費は安くなり、最後には最低生産費が基礎価格となるまで進まずにはゐない。これが今日の一般産業界の傾向であつて、消費者である多數の國民にとつても最も望ましい良き傾向であることは言をまたない。

しかしこの傾向は工業界が主たるものであつて農業界ではそれと反對に世の進むにつれて基

基礎価格は益々最高生産費に近づき行くものなのである。之は農業と工業との事業の性質上の相違から生ずるものであつて、工業界にあつては機械の進歩労働能力の増進などは限りなく生産費を低廉にして行き得るけれども、農業の方はそれと違つて限りある土地を耕して行くので、いかに耕作法を改良してもある程度まで行くと所謂收穫遞減法と云ふものが作用してくる。解り易く云へば荒蕪の地には最初は二倍の勞力をかけ肥料をやれば二倍の收穫を得ることが出来るが、ある程度以上に達するといくら生産費を餘計に投じても收穫の方はそれに伴はずにだんだん減少して来る。更に良い土地を耕耘し盡してだんく悪い土地に移つて行けば、生産費は益々餘計にかゝつても收穫は思ふやうにゆかず、どうしても收穫物は高く賣らねば引合はぬこととなるのである。これは農業が土地と云ふ限られた範圍を基礎とするもので、其土地は良い所から先に耕すので、勢ひ、悪い土地があとに残り、生産費はいやでも騰つて行くのは免れない所で、これは工業界が機械其他の果ても知れぬ廣い領域をもつて居るものと根本的に相違の

ある所である。従つて農作物はいつも其基礎價格が最高生産費の方へ近づく傾向をもつて行く。それでなければ農業地の開拓と云ふことは結局行はれず、供給は不足を告げる他はない。日本の農政學者は米價問題に就て、意見を吐く時には、きまつて米價は引下ぐ可きものでないと云ふ根本主張を持ちつゞけ、米價さへ高くなれば耕作地も殖え、供給に不足はないと云ふのを例としてゐる。もし代用食と云ふことを考へず、たゞ日本内地で出来る米だけで年々に増殖して行く人々に對する常食を供さうとするならば、農政學者の云ふ所は理の當然であつて、米價は長い目で見れば、いやでも最高生産費へ最高生産費へと上つて行く他はないのである。之を要するに總括的に云へば商品の價格は生産費を中心にして自然的に調節されるやうに出來てゐるものであるが、工業製造品については漸次に最低生産費の方に向つて中心が移動し、農作物に就ては之と反對に最高生産費の方へ移動する傾向をもつものだと云ひ得るのである。

(四) 人為的の需給増減

前節に述べた所は自然的の需供給が商品の價格に作用するものなのであるが、この他に人為的の需給の調節が價格に變動を來さしむることも忘れてはならない。私は前に、需要とはあるきまつた限度の價格を以て商品を買はふとする數量であると云つた。單に人が欲しいと思ふものゝ量ばかりではないと云つた。しかし人が此世に生きて行く爲には、あるきまつた限度の價格を頭の中に入れて、それ以上に高くなれば買はずに済まして居られると云ふものばかりではない。値段にかまはず否でも買はねば済まないものがある。生活必需品がそれである。日本人はどんなに困つても米の飯だけは喰はずに居られない國民である。農作物の性質が所謂收穫遞減法に左右され長い目で見れば本國で出来る米の量の増加率は到底人口の増殖率と比較して同程度で進んに行くことの出来かねるのは明かなことであるから、國家百年の大計から見

れば常食を何とか變へて行くべきが本當であるが、その點では日本人は頑固な國粹論者でいつまでたつても米がなければ一日も過して行けない。そこでいざ米が思ひ切つて不作になると金子に關はず米價は暴騰する傾向をもつてくる。供給が少なくなつても需要は依然として減じやうともしないからである。其他副食物についても、略同様のことが云へるし、衣類である綿布縮糸についても同じ傾向である。更に家屋も人間が生きて行くにはどうしてもなくてはならぬものであるから、住宅の借り手ばかり多くて住宅の数がこれに伴はなければ家賃はどこまでも騰つて行かざるを得ない。かやうに人間の衣食住に缺くことの出来ない生活の必需品は供給の多寡如何にかゝはらず需要は自ら一定して居つて、いやでも應でも必要なものであるから、これに伴ふ價格の消長は自然的に調節されて、基礎價格に戻つて來るのを待つてばかりは居られない。

そこで生活の必需品に對しては政府又は公共團體、自治團體等の力で人為的に價格の調節を

試みることがある。關東大震災に伴つて政府が食糧品、建築材料、其他必需品の關稅を減免して輸入を容易ならしめたのなどは其一例である。其他或は必需品の輸出に制限を加へることもあれば、戦時中の歐洲諸國のやうに政府が日常食糧品其他の消費を強制的に制限してしまふこともある。

尙今の例は價格が騰貴した場合又は非常に騰貴しつゞける怖れのある場合に就て云ふことであるが、生活の必需品については下落の場合も矢張同様である。何故かと云へば米にしろ其他のものにしろ、たとひ非常な大豊作であつても國民の需要する數量は矢張一定してゐる。豊作で安いからと云つて一日三合飯を喰ふものが一升喰ふやうになるものではない。そこで餘つたゞけの數量に對しては生産費での調節などは眼中になしに下落しつゞけて行く。そこでかやうな場合にも騰貴の時と同じやうに人爲的の調節作用が加はつて價格が平進に保たるゝ様試みられるのである。米價が非常に下落した時に、政府が買上米をして調節を計ると云ふやうなこ

とは其一例である。

かやうに商品價格は自然的の騰落ばかりではなくて人爲的の調節も非常に變動に大關係をもつものであつて、特に國民の日常必需品に關して、價格の大變動の場合には、例外なしに、此人爲的調節が作用するものなのである。猶人爲的調節については更に後章に於て物價調節のくだりで改めて述べることにする。

(五) 獨占價格と再生産の出來ないものゝ價格

普通の商品は需要供給の關係如何によつて價格に變動を來して來るが、こゝに自然の需給關係を離れて、自分勝手の供給によつて價格を左右するものがある。再生産の出來難いものと、獨占市場のもの、即ち他に自由競争の許されてゐない商品とがこれである。再生産の出來難いもの、即ち書畫骨董品の様なものは、たとひ其値段をいくらであると云ふ

ても競争的に再生産をすることが出来難いものであるから供給者の心一つで値がきまる他はない。雪舟の山水の名幅を一萬圓だと云つても賣手がそれから一文も引かないと云つて居る以上他に對抗すべきものはない。其雪舟の山水の欲しい者には、それが高いからと云つて他の安い雪村の幅を二つ持てば満足すると云ふわけには行かない。かやうに再生産の出来難いものは、それ一つが獨得の値段をもつて需給關係とは何の交渉もないものである。

一方獨占とは何であるかと云ふと、個人又は團體何れでもよいが、其商品の供給を支配する力を有するもので、これには完全なる獨占と然らざるものとある、完全なる獨占と云ふのは或る生産者なり其團體なりが全部其供給を一手に收めて他に競争者も許されなければ、又其商品は代る可きものもないものを云ふので、我國に於ける煙草專賣局の煙草に於けるが如き臺灣の樟腦の如きがそれである。これらは何れも完全な獨占であるが供給を一手に收めてゐる點はこれと同様であつても、たゞ競争的地位に立つ代用物のあるものがある。例へば東京市に於ける

東京瓦斯株式會社の瓦斯供給の如きものであつて、瓦斯だけは正に同會社で獨占はして居るが燈火用にしろ熱用にしろ、之と競争的に代位する電氣が別にあるので、專賣局の煙草のやうに完全無缺に自分の手で供給を自由に調節し、價格を思ふやうに上げると云ふやうなことは出来ないのである。

しかし何れにもせよ以上挙げたやうなものは其商品については供給を一手に收めて獨占してゐるのであるが、今日の社會で最も弊害も多く同時に最も手廣く行はれて居るものは、資本の勢力によつて同一商品の供給を大部分左右する實力を備へて團結する組織の獨占である。即ち所謂カーテル、並にトラスト等がそれであつて、數多の同一事業を營む會社が表面は分立をしながら其内部に於いては全く合同と同様であつたり、或は生産協定や、販路協定を行つたりして、其點では全く無競争の武器を擁して獨占の利益を收めようとするものである。

さてカーテルにしろトラストにしろ其價格の決定はどうして決まるかと云へば、前の數節に

於て述べたものゝやうに需要の點に於ては自然的の制限を受けるけれども供給の點に於ては全く自分の勝手にこれを左右して價格を上騰せしめることが出来る。それ故獨占價格は競争市場にある商品に較べてどうしても人為的に高價にされてしまふもので若しも其商品が奢侈品である様な場合には一般社會に對する弊害の程度は尠いが、生活必需品に對してこの獨占の暴威が振るはれる様な場合には、國民生活に對する害毒は決して尠しとしないのである。それ故、この獨占事業に對する對策は各國に於てそれ〴〵論議もされ、實行もされて來て、或は全然、獨占を禁止して資本家の自由にカーテルやトラストを作ることを得せしめないやうにするがよいとするものもあつて、米國などではトラストの弊害が大きいだけに、一時頻りにトラスト全滅論が唱道されたこともあつた。又或はすべて獨占的傾向をもつものは官有又は公有として民間の資本家から奪ふがよいと云ふ論もあり、獨占價格には國家が干渉して彼等の自由にさせぬやうにせよとの中庸の論議もある。我國でも此點で實行をして居るものは尠くない。現に東京瓦

新の如きは東京市が其料金に干渉し、株主の利益配當に對して所謂スライジング・スケールを以て制限を加へて居る。猶我國の獨占價格に關して、かの紡績聯合會や、糖業聯合會の價格決定に對する方針、最近に於ける船舶業者のプール計算や、社外社主の内航運賃同盟などは、一般人の注目に値するものであると云はねばならぬ。

第三章 一般的に物價を動かす原因

(一) 通貨と信用證券

前章に述べて来たものは個々の商品の價格を變動させる原因であるけれども、今度はあらゆる商品の價格の上り下りに一様に影響して来る一般的原因である。其原因は何かと云へばそれは交換の媒介物となり、各商品の價格の尺度になる通貨であつて、つまり此通貨の増減がどんな風に物價に影響して来るかと云ふことについて述べようとするのである。

先づ其理由を説明する前に、物價を一般的に動かして行く通貨とはどんなものかと云ふことを一應解説して置く必要がある。

通貨と云ふのは一國の法律が認めて、交換の尺度としての強制通用力をもつたものである。

そこで通貨は其實質の價値が何であらうと問ふ所ではなく、たゞ賣買上、交換の媒介物として立派な尺度になつて行きさへすればそれでよいのである。我國は金貨本位國であつて金貨が標準の正貨となつて居り、補助貨として銀貨や銅貨や白銅貨がある、これらのものはそれ自身にも地金から云へば價格をもつてゐる。けれども一たん通貨となれば、たゞ交換價値以外には効用を認めないで、それ自身の効用を問題にしないのである、一錢銅貨の銅は地金につぶせば何厘か何毛かの價格があるけれども通貨としての一錢銅貨は地金の價値とは無關係に、たゞ一錢と云ふ他物との交換價格の代表尺度を表はすものなのである。正貨や補助貨幣はそれでもまだそれ自身の價値をもつてゐるけれども補助紙幣即ち兌換券になると、高が小さな一枚の紙片で、それ自身の價値は殆んど無いが、しかしこれも立派な通貨で、交換媒介物として國法に定められた尺度である。かやうに強制的に國家が法律で定めた價格の代表物を通貨と云ふのである。それ故ローマノフ家のルーブル紙幣は今日では強制通用力がなくなつたので、たゞ紙片價段だけ

になつて、十萬ルーブル紙幣が一錢か二錢で夜店商人に賣られるやうになつてゐるが、あれも舊露國で通貨と認められてゐた時には立派な一萬ルーブルは一萬ルーブルの交換代表物としての効用をもつてゐたわけなのである。

通貨とは以上述べた所の如きものであるが一般物價の騰落の原因となるものは其通貨の數量である。こゝに數量と云ふのは其國にどれだけの通貨があるかと云ふ全體の數量を云ふのではなくして、其通貨の中で現に動いて流通して居るだけの數量のことを云ふのである。人が金庫の中へ仕舞ひこんで使はず居るやうな金はこの數量の中へは入らない。現に使はれて轉々して居る通貨の數量だけがこゝでは必要な數量となるのである。

さて以上述べ來つた通貨の他に今日では通貨と同じやうに價格の尺度となり、交換の媒介物になるものがある。それは何かと云へば小切手であるとか其他の手形類であるとか云ふやうな信用證券である。かやうな信用證券類はどこにでも盛んに流通すると云ふわけではなく、商工

業が盛んであつたり、取引をする人々の間に信用が発達したり、又はこれを利用するだけの金融機關が備はつて居る所であれば行はれないものであつて、國から云へば商工業の盛んな文明國程、信用證券の利用は廣く、地方的に云へば、主として都會が盛んであつて、邊鄙な所には行はれない。しかし現在では世界の文明國で小切手類を日常の支拂に使ふ傾向は盛んになつて來て、米國や英國などでは、まるで通貨と同じ位の實際的普及性をもつて交換の媒介に供せられてゐるので、英國では小切手は通貨に他ならないと論ずる學者さへある位である。

しかし斯様な信用證券類が通貨でないことは明らかなことである。小切手にした所が其他の手形類にした所が、結局、今でなく、先きになつて貨幣で支拂をするに云ふ約束を現はした證券なのであつて、其約束を信用して通貨同様に誰も授受を行つて居るのであるが、これは決して國家が強制流通力を附與したものではない。受取人がいやだと云へば、それまでの事で通用はしなくなる。更に貨幣ならば、國家の信用がどうなつた所で兎にかく十圓札はどこまでも十

圓だけの價格を現はすものとして通用する。(尤もこれは國內だけのことであつて外國に對しては爲替の上り下りによつて、交換價値の内容が變つてくるが)しかるに小切手などはさうは行かない。餘りに餘計に濫發すれば信用がなくなつて、十圓と書いたものも、十圓には通用せず割引率が上つてくる。約束手形や爲替手形は使ひ途による爲めではあるが、割引くのが常態になつてゐる。かやうに強制通用の力もなければ、それ自身の價格にも變動がついて廻るものなのであるからこれを通貨と云ふわけには行かないこと勿論である。しかしいかに通貨でないとは云へ、實際の今日の社會ではかやうな信用證券が通貨と同じやうに盛んに流通して居るのであるから、物價と通貨との關係を考へる上には、この信用證券を度外してしまふわけには行かなくなつてゐるのである。各地の手形交換所の交換高が年々大きくなつて行くのを見ても、いかに信用證券が金融市場で重大な役目を勤めて居るかゞわかるであらう。

(二)貨幣數量説による説明

物價と通貨とが深い關係をもつて居ることは確かなことであつて、通貨も一國に流通する數量には始終増減がある。そこでこの増減が其時の經濟組織に恰度適合するやうな一定の數量以上を増したり、減つたりした場合には矢張り通貨價値に變動を來して来る。ところが、通貨は他の貨物のやうに供給が過剰になつて價格が下り、供給が薄くなれば價格が上ると云ふわけには行かない。何故ならば通貨はそれ自身で他の總てのものゝ價格の尺度になるものであるから、價格で、上り下りが現はれて來る筈がないからである。そこで今貨物の供給に變りがないとして考へて見ると通貨が過剰になつた場合即ち貨物の數に比べて、その交換媒介物である通貨の方が餘計になると、當然通貨の價値は下落するが、通貨自身には價格がないから、物價の方で變つて來て、物價が上るのである。其反對に通貨の方が非常に縮少すれば物價は下つて來

ることになるのである。この通貨と物價との因果の關係はジョン・スチュアート・ミルの時代から随分長く研究されて來たものであつて、其因果關係をはつきり示したものが所謂貨幣數量説なのである。

貨幣數量説とは何かと云へば、取引の數量にして不變なりと假定すれば、通貨の數量の増減と、物價の騰落とは正比例をなすべきものであると云ふにある。即ち取引される商品が數量に於て變らなかつた時に、通貨の數量が倍になれば、物價も倍になり、逆に通貨が半分になれば物價も半分に下落すると云ふのである。この説に對しては最初から随分反對論をもつてゐるものも多い。碩學ゴツシエンは今から六十年も前に『物價平準と通貨の數量との關係を、殆んど憤怒に近い感情を以て認め無い者が随分ある』と書いたが、今日でも依然として通貨の數量と物價とは關係のないものだとして固く主張して止まない人が澤山にある。現に高橋政友會總裁が、大藏大臣であつた時に、物價騰貴は決して通貨膨脹が原因ではないと頑固に主張して、當時の野

黨であつた憲政會と頻りに論戰し、一般から其無智を嘲笑されたことは私共の記憶に新しい事である。しかし政府に立つてゐるものは多くの場合いろ／＼の必要からつい通貨を膨脹させ易いので、それに伴ふ物價騰貴の非難を國民から買ふことを苦痛とする關係上、得て貨幣數量説を否認し易い傾きがあるもので、従つて野にあるものはそれと又反對の意味で、物價騰貴をただ通貨膨脹にばかり歸して政府攻撃の種にし易いものである。或は高橋是清氏の意見もかう云ふ政治常識から云へば、大いに割引して考へなければならぬものかも知れないのである。兎に角かう云ふ政治的意味は別に於て、經濟上から堂々と貨幣數量説に反對する者もあることは事實で、古くからあつたのは所謂貨幣數量説なるもので、通貨の價値は數量の變化だけでは變らぬもので、たゞ其實質が變化する場合にばかり起るものであると主張するのである。しかし近年に於ける貨幣數量説に對する最も有力な非難は何かと云へば、それは前節に述べた、信用證券の代用と云ふことである。貨幣數量説は何と云つても商品の賣買取引が皆通貨で行は

れるものと考へての上、初めて成立つものであるが、實際に於ては今日では取引上の交換媒介物としては、通貨だけではなく、小切手其他の信用證券がまるで通貨と同じやうに盛んに流通して取引に用ひられて居るので、それと同時に貨幣の數量と云つてもたゞ現に流通して居る數量だけを目安にするのは間違ひで、その通貨が、どの位の速さで轉換して行くかによつて物價の關係は非常に違つて來る。即ち一萬圓の金でもこれを或る期間内に一萬圓としてたつた一つのものに動かして居る場合と、同じ一萬圓を三度も五度も引くり返して用ひれば、金は一萬圓でも數量から云へば三萬圓にも五萬圓にも等しくなる。それ故簡單に通貨の數量だけを見てそれが物價と正比例して増減すると見るのは間違つてゐると云ふ説なのである。

この説は貨幣數量説に對して可成り有力な非難であつたが、近年になつて、前に書き記したことのある、ピゴ教授であるとか、フキツシャー教授であるとか、マーシャル博士等が、舊い貨幣數量説に新しい解釋を加へて、新貨幣數量説を盛んに唱道するやうになつてから折角の

非難も新しい主張で手痛い反駁を受けることになつてしまつたのである。此新しい解釋による貨幣數量説に就ては、非常に面白い研究材料が多く、それだけを紹介しても立派な長いものになるであらうけれども、それはこの書物の目的ではないので、極めて簡単に其略筋だけを書いて置くに止めることとする。詳しく研究したい方は今書いた諸氏の書物や、千九百二十三年に出た、キーンズ氏の "A Treatise On Monetary Reform" なるを讀まれることを、おすゝめして置く。

さて其新しい貨幣數量説と云ふのはどう云ふのかと云ふと、商品の賣買取引は今日では素より通貨だけで行はれるのではなくして、各種の信用證券によつて行はれることは言をまたない。けれども此信用證券の方は決して通貨とまるで無關係に單獨に働くものではなくして、どこまでも信用證券と通貨とは或る一定の比例を保つて行くものである。つまり、通貨が膨張をすれば従つて信用證券も膨張し、物價は騰つてゆく、其反對の場合も素より同様である。だから

信用證券による數量とそれを通貨で支拂ふ割合とは目先の期間内ではいつでも同一に等しいものと見て差支へなく、たゞ「長い間」を置いて見た時に初めて相違が生じてくるのである。故に原則から云へば、たとひ信用證券は盛んに流通して居るにした所が、結局通貨の數量の増減は物價の騰落と正比例すると云ふ法則は動かすことの出来ないものだと言ふのである。

この「長い間」と云ふ反證の根據を許す可き文句については、キーンズ氏などは恐ろしい皮肉混りの斷案を下して、「この長い間と云ふことは時事問題を解決する上には、下手に囚はれておればとんだ間違ひの素となる、長い間経てば吾々は皆死んでしまふのだ。」と云つてゐる。又通貨なり信用證券なりの流通の速度と云ふことが當然問題になつてくるので、通貨がませば流通の速度も増すと考へるものもあるが、これは間違ひで、流通の速度は其時、場所、人等によつて左右されるので貨幣の數量とは關係が比例するものではない。それ故歸する所は賣買取引の數量を不變たとするならば、通貨の數量が増減すれば、同じ割合で信用證券も増減し、一般物價

はその割合に従つて騰落する。つまり解釋の相違だけで根本原則から云へば、通貨の増減と正比例して物價は騰落すると云ふことになつてしまふのである。これが新貨幣數量説の云ふ所なのである。

此説についても學者の間に猶反對論を唱へるものもある。しかし左様な穿鑿は抜きにして、こゝに最後の結論として云へば、いろいろ六つかしい反對論はあるにしても結局、通貨と物價との間には極めて密接な關係があつて、通貨が膨張すれば物價は騰り、通貨が縮少すれば物價が低ると云ふことだけは争はれない事實だと云ふことに間違ひはない。千百の議論はいかやうにもあれ、現に戦後獨逸が財政困難の結果無暗に政府が紙幣の濫發をやつて、國內がインフレーションの爲めに通貨で充満し出した爲めに、物價は頻りと暴騰して、食事一つするのに何萬馬克と云ふとんでもない高い支拂ひをしなければならなくなつたと云ふ事實だけを見ても、いかに通貨膨張が物價の騰貴を招致するかを明かに裏書きして、千百の反對論を雄辯に打破して

居るからわかることと思ふ。

云ふまでもなく通貨の膨張はいかなる形で現はれるかと云へばそれは兌換券発行高の増加である。そこで物價騰貴と兌換券増發との間にはいかなる比例數字が現はれるかと云ふ研究はそれぞれの専門學者によつて頻りに考究しつゞけられて來てゐるが、元來、此二つのやうな變數を比較するには一定の方法だけでなく、さまざまの計算が試みられるので、其結果は普通の數學のやうに簡單には行かない。しかしいろいろに計算された結果を綜合して見るとほど大同小異であつて、其間にある比準を見出し得ることゝなつて來る。

我國に於ても經濟學者中、この面倒な研究に従事して居る篤學者が尠くなく、其研究の成果から見ると、何れも一般通貨の流通高と物價指數との間には密接な關係を有することが明らかで、兌換券月平均發行高と東京卸賣物價指數とを對照して其關係を細言すると

一、照應係數は二十年間を通じたと、又戰前戰爭開始後たるとを問はず、〇、八以上にし

て即ち兩者の關係は極めて密接なり。

二、其平均上、大體に於て、物價指數の平均値より一〇の變動は、兌換券發行高の四四、七百萬圓の變動と伴ひ、兌換券一億圓の變動は物價指數の二二、三と伴ふものゝ如し。

三、戰前と開戰後とを比較せば開戰後、兩者の關係は一層照應せり。

(經濟論叢、十二、十、一、蜷川虎三氏)

と云ふやうな研究發表もあつて、物價指數と、通貨膨脹の最も大きな要素である兌換券の増發との間には、比率的の因果關係が存することを示して居るのである。

第四章 物價の變動は一般にどう影響して來るか

(一) 物價騰貴は生産者に利益を與へる

物價の變動した場合にはそれが前二章に述べた個人の商品價格によつて變動する時と一般的原因によつて一般物價が一樣に變動する場合との異なるに従つてその影響の範圍も矢張違つてくるのは勿論のことである。一般的原因による時には商品の全部が一樣に變動するので其範圍は廣いが、個々の價格の場合には其原因のあるものだけが變動するので其影響も従つて狭い範圍に限られて、まふことはこれ亦常識で考へて見ればわかることである。さてかゝる物價の變動は騰るか下るか何れか一方であるから本來ならば騰つた場合と下つた場合との雙方の影響を

述べるべきであるが一方の影響を示せば、他方の影響は丁度其の反對である事は明らかで、元來物價なるものは騰貴問題の方が多いのであるからこゝには騰貴の影響を述べて置く事にする。先づ物價が騰貴した場合に最も利益を受けるものはいかなる職業のものであるかと云ふとそれは生産に従事し、商業に従事して居るものである。何故かならば物價の騰貴によつて一般に利益が多くなる計算になつてくるからである。つまり生産業者で云へば原料品の手持材料が何れも安くなつてしまふ計算である。物價が上がることは貨幣の價格が下がることに他ならぬので、一圓のものが二圓になるとすれば、一圓で今まで一つ買へたものが半分しか買へぬことになる。そこで生産業者としては一圓の時に仕入れをして倉に持つてゐたものが物價騰貴の爲めに二圓だけの價格をもつ事になり黙つてゐても一圓儲かると云ふ勘定になつて來るのである。それと同様に商人にしてもそれまで仕入れて手持になつてゐたものは、悉く値が上つてくるので、其値上りだけの差額が黙つてゐても儲けになつて來る。

斯様に物價騰貴の結果として生産業者の利潤が増して来るので事業家は何れも景氣のよいのに乗じて、或は工場の擴張をするとか、その他さまざまの方法で生産の増加を計ることになり、金融も活潑になつて金利も上つて来ることになる。これは農産物であつても同様であつて、農産物の値が上れば、耕作反別も増えて來、従つて地代も上つて來る結果になる。前に記したところのあるやうに、日本の農政學者は米價さへ騰つて居れば日本では米穀不足の心配はないと論ずるものゝ多いのも全くこの理由によるもので、米價が上れば農家の利益は増大し、利益が多くなるから耕作反別が殖え、従つて米の收穫高も増加して、最早米の不足を訴へるやうなことはないのであるとなすものである。

しかし農作物等は週期が非常に長くて他の工業品のやうに轉換が早くない。米にしろ麥にしろ一年に一度しかとれない。そこで今年、穀物の價格が高だからと云つて急に其作付反別を増しても來年になると、今度は非常な豊作で供給過剰となり、其價が一時に下落する。生絲の値が

高かつた翌年には、掃立も増加し、桑の植付も多くなつて、結局それが安値の原となると云ふやうに例はよくあることである。

斯様に物價の騰貴は生産家に利益を與へ、其結果、利子だとか地代だとか云ふものが上つて來るが、勞銀も亦上騰することになる。しかし此勞銀の騰貴は、利子の高騰が生産業の旺盛なのに、すぐに相伴つて行くやうに、それ程現實に同一の歩調を辿るものではなく、どうして一番後になり易いのである。これにはいろいろの理由があつて、物價の騰貴は直に勞銀の上騰を相伴はぬわけなのであるが、勞働者の側から云ふと物價騰貴特にそれが、個々の商品だけの騰貴でなくして、一般的原因から來た現象であつて生活必需品が一樣に騰貴したやうな場合には、すぐ様、收支が相償はなくなつて、生活を脅威され、重大な社會問題を惹起するやうになるのである。此事については更に章を改めて、物價や生活費を考察する時に詳しく述べて見ることとする。

(二) 物價騰貴は消費者に不利を與へる

物價騰貴は生産者や商人に利益を與へるものであるから、丁度それと反對に物を消費する側のものにはそれだけ不利益を與へることになるのは理の當然である。しかし物價の騰貴はそれが一般的にあつた場合には總ての職業總ての階級のものに一樣に影響を及ぼして來るとは云ふもの、物價騰貴によつて利益を得る生産者や商業を營むものは、また、自己の利益と相殺したり、或は一般物價騰貴によつて蒙る不利よりも以上に、これによつて得る利益の方が多くなる場合が多い。それ故に同じ消費者と云ふ一般の稱號で呼ぶにしても、生産者や商人等は不利を蒙る點は極めて少ないものである。しかるに、消費者の中には商品を生産したり賣買することとは全然縁が無しに、たゞ商品を消費する側に許り立つてゐる階級がある。即ち、役人であるとか學校の教師であるとか、其他自由職業に従事してゐるもの、並に、銀行會社員であるとか

云ふ月給で生活して居る者等である。尤も此内銀行會社員などは物價の騰貴によつて銀行なり、會社なりは利益を受ける場合が多いので、これらの使用人等も直接即時ではないにしても矢張り其利益に均霑して月給の昇騰と云ふことになつてくる。しかるに役人であるとか、教師等になると、全くかう云ふ間接の増収がないので、たゞ一般生活費の昂騰に伴つて自己の勤勞を値上げして行くより他に途はない。しかるに生産に直接従事して居る労働者ですら其勞銀を物價騰貴によつて値上げされるのは餘程後のことであるから、況して直接、生産に關係のない、これらの頭腦労働者の受ける報酬が上げられるのは、餘程更に遅れるものと云はなければならぬ、そしてこれが遅れれば遅れる程、其間に忍ばねばならない苦痛と不利益とは大きいものなのである。

それでも以上述べたものはまだ良い。何故かと云へば、収入の増加が遅かれ速かれ現はれてくる見込があるからである。しかるに茲にいかにも物價が騰貴しても其収入に於て何等變動の見

込のない人達がある。かういふ種類の定額収入生活を営んでゐる人は最も物價騰貴の悲惨なる影響を蒙る人々だと云はねばならぬのである。其人々とはいかなるものかと云へば、それは年金や恩給等の定額の支給によつて生活して居る人々のことである。たとへば年金や恩給で一月百圓だけを支給されて生活して居つた人が、或時の物價では人並の生活を営んで行くことが出来たと假定する。それが其後物價が二倍に騰貴したとすれば、之を貨幣價值から云へば、二分の一に下落してしまつたことになる。百圓だけ買へたものが、物價が二倍になれば其時の五十圓分しか買へぬことになるので、現實の計算から云へば百圓は依然百圓だけ受取つて使つても實際は初めの五十圓しか費はぬことゝ全く同様になつてくるのである。しかも恩給も年金も、金額はいつまで経つても同一であるから事實上、恩給や年金は物價が騰貴するに連れて減額されたのと同じ結果になつてしまふのである。軍人の遺族などは此點に於て最も氣の毒な立場にあるものであつて、若し本當の年金の趣旨から云へば、百圓なら百圓と其當時の貨幣價值

を標準にして、物價の騰貴を参酌して、年金價格を定めでもするのが最も當を得たものであるだらう。

何れにしても總てを通じて、生産や商賣に關係のない、單純な消費者は、物價騰貴によつて一番不利な立場に置かれるものと云はねばならぬのである。

(三) 物價騰貴は債務者に有利となる

次に物價騰貴は貸し主に不利となつて、借り手に有利となつてくる。こゝに債權者と云ふのはたとへば、公債や社債を持つて居る者、銀行に預金をして居る者、金貨を營んで居る者初め總て人に金を貸して居る者、郵便貯金をして居る者や、保険をつけて居る者等が、それであつて、かゝる人々は物價が騰貴すればそれだけ損をすることになつてしまふのである。何故かと云へば、物價の騰貴はそれだけ貨幣價值の下落なのであるから、高い價值のある時に金を貸して、

それを安く買った金で返して貰ふことになるからである。それ故債権者の方から云へばそれだけ利益になることになつて来る。

解り易い例を擧げて説明すれば、ある人が生絲一捆千圓した時に、それを借りて二年後に現金千圓返すと云ふことにしたと假定する。ところが二年後に貸主は千圓の金を返して貰つたとして、其時生絲が暴騰して二千圓になつてゐたとすれば、生絲は千圓では半捆しか買ふことが出来ない。つまり一捆貸して、たつた半捆しか返して貰へなかつたと云ふ勘定になつてくる。これでは一割やそこらの利子を貰つたとて到底引合つた話ではないのである。火災保険にしても時價一萬圓の家に保険をつけて、それに相當する料金を支拂つて行つたとする。其内に物價はだんだんに上り、貨幣價値はだんだんに下つて行つたとして二十年後に焼けてしまつていよいよ一萬圓の金を受取つて見た所が、家の値段は高くなつて焼けた家を建てるには十萬圓もかかるやうになつてしまつたとする。かうなれば其時一萬圓受取つても事實に於ては焼けた家の

十分ノ一位の小さい家しか建てられないと云ふ仕儀になつて非常な大損失となつてしまふのである。

元來物價は貨幣數量説によつても明かなやうに、年々通貨が殖えて行くに従つて、漸次に高くなつて行くのが常態であるから長期に互に貸借關係にあつては、よくよくこの理屈を考へて利子の點を考量して置かなければ事實上貸主は損ばかりして居ることになつてしまふのである。高い價値のある金を貸して、いつも安く下つた金ばかり返して貰ふのでは到底引合はぬ話である。

以上述べ來つた所は何れも物價騰貴の場合の一般的影响についてのことであるが、反對に物價が下落すればどうなるかと云へば、何れも今述べた所と正反對になるものであることは、こゝに改めて言ふまでもないので、敢て繰返すことを止めて置く。

第五章 物價の變動は貿易と國家の財政 上にどんなに影響するか

(一) 輸出と輸入は自然的に物價で調節される

前章に述べた所は何れも物價變動の一般に及ぼす影響であるが、私は此章で國民經濟上特に重要な特殊的影响について述べることにする。其第一は貿易である。

原則通りに云へば物價と貿易とは相互に自然的調節機關となつて、輸出と輸入とが相轉換輪廻して、ぐる／＼廻つてゐるものである。

今、物價が騰貴すると利子も勞銀も、一般の生産費も總て高くなつて來るので輸出品は高値になり外國では買控へをするやうになつて輸出は減退して來る。それと同時に國內の商賣人

も自分の國で生産したのと較べて外國品を買ふ方が割安で儲かる勘定になる所から、皆外國品の買付けを初めるやうになり、輸入は増加して來る。かやうに、輸出品の方は海外市場で競争することが不利となつて減退し、一方輸入は増加するので、勢ひ輸入超過と云ふことになつて來る。輸入超過となれば其超過額は外國への支拂ひの方が多くなつてくるので、それだけ正貨は國外へ流れ出して通貨が縮少されることになり、金融も逼迫して來る。従つて今度は物價の低落と云ふことになる。

物價が低落すれば今度は外國の商人が自國の物よりも安く買へるので盛んに買付けて來るの
で輸出が多くなり、同時に國內では外國のものを買ふよりも國內品を買ふ方がいゝので外國か
ら商品を買はなくなつて輸入は減退して來る。かうして輸出超過となる結果、外國から正貨の
流入が多くなつて、國內の正貨は増加し、又通貨膨張と云ふことになる。通貨が膨張すれば當
然の結果として物價は又騰貴し、前に云つたやうに貿易は再び逆轉して輸入超過となつて

來るのである。

斯様に物價と貿易とは常に自然的の調節機關となつて、輸入が永久に續くと云ふやうなことはなく、同時に輸出許りつゞいて果てしがないと云ふこともなしに、うまい具合に相轉換して行くものなのである。

これは原則的の話なのであるが、さて實際から云ふと、それ／＼其國の財政状態や、其時の事情によつて、必ずしもいつも此原則通りには行くものではないのである。

(二) 近時の物價騰貴と貿易

近年に於ける我國の物價騰貴と貿易との關係を見ると、歐洲大戰のお蔭で大正四年頃から日本の輸出は非常に振るひ出して戦時中の全四年間と云ふもの輸出超過續きと云ふ景氣のよい現象ばかり現はれたのであつた。其結果貿易尻の決済だけでも約十四億圓と云ふ巨大な正貨を受

取る計算になり、これに貿易外の受取勘定を加へれば二十四億見當になつて來た。これだけ巨額の正貨激増を來したのであるから、通貨は著るしく膨張し物價は暴騰に亞ぐに暴騰を以てするの勢ひを辿るやうになつて來た。かくして民間の會社は何れも競つて事業の擴張を行ひ、一般民間の消費も激増して奢侈の風潮さへ一世を風靡するの勢ひとなつた。金融界も漸次に引締つて金利は高く上つて來たけれども、何分にも歐洲の全土が戦争と云ふ大事件を控へて、物資の需要が盛んであつたので、輸出は益々振るひつゞけて居つたのである。

しかるに物價が斯様に暴騰しつゞけて、しかも其騰貴率が著るしく高い場合に、特殊の事情でもなければ、いつまでも輸出續きと云ふやうなことの行はれる筈もなく、戦争と云ふ極めて特殊な原因の去ると共も大正八年の末から九年にかけて貿易は一變して輸入超過となり、それから又輸入超過つゞきで大正九年から大正十二年の六月末までに十四億からの入超過となつて、折角戦時に贏ち得た正貨を大半消費し終るの不仕末となつたのであつた。たゞし我國に

於ては入超になつてもすぐに正貨が減少することなしに、大正九年頃は入超つゞきで然も正貨は増加する一方であつた。これは其時受取る正貨勘定が、當時の入超の額よりも多かつたことに原因して居るのであつて、かゝる變態的の狀態が、我國の一般の人士をして、いゝ氣になつていつまでも戦時好況時代の夢を、不況の兆の見え初めた時に猶、見續けさせた原因となつたのであつた。

かゝる折に大正十二年の秋九月、關東の大震災は突如として盛榮の夢のまだ覺めやらぬ我國の財界に一大鐵槌の打撃を與へ、百億圓以上の物的損害を與へ、復舊の爲めに外國品の輸入を敢てせねばならぬやうになり、大正十三年の上半期には六億圓以上の大入超を招來することになつたのである。かやうな大入超によつて正貨が流出する關係上、物價はやゝ下り出して、本來ならば輸出超過と引續き變つて行く可きなのであるが、大震災と云ふやうな不時の變化は丁度戦争と同様であつて、正貨がいかに減つても、入超がいかに續いても復舊復興に必要なもの

だけは否でも應でも輸入せねばならぬので、原來の法則通りに、物價と貿易の關係が行はれるものとは云はれないのである。これは一つは我國が原料品に缺乏して居つて、何としても國內だけでは之に代る可きものがないと云ふ先天的の缺點にもよる所が多いのである。

しかし何れにしても貿易と物價との因果關係は矢張り大局から見れば動かし難い大法則として動き流れて行くものであつて、或る時期或る部分から云へば變態的の狀態が現はれても、長い目で見れば我國の貿易と物價も依然として此大法則の下に動いて行くものであることは否めないものである。

(三) 物價騰貴は國費の膨脹を來す

次に物價騰貴が國家の財政上に及ぼす影響はどうであるかと云ふとこれは矢張り一定の收入によつて生活して行く個人の家計を大きくしたやうなものであつて、物價騰貴によつて蒙る打

16
24

擊は甚だ少からぬものがあるのである。

云ふまでもなく國家の財政はある一定のきまつた歳入と歳出の豫算を議會できめて其平均を保たせてあるものである。そこで此最初の豫定が狂つて豫算で作製して置いた歳入よりも歳出の方が非常に多くなるやうな場合には、又追加豫算を議會に出して歳入の増加を計らなければならぬやうな仕末になつてくるのである。そして、かう云ふ豫算の狂ひは、其時々によつていろいろの原因のあること勿論であるが、物價騰貴は此點で最も重大な役目を演ずるものなのである。

物價騰貴が財政上に及ぼす影響は素より歳出に於てばかりでなく、歳入にも影響して来る。たとへば物價が騰貴して来れば官業の収益も民間の會社と同じ理由で増加して来るし、官有財産たとへば山林の収入なども高く賣れるので、利益が増し、特殊の會社に對する宮内省の持株なども増配に伴つて収益が増して来る。けれども何と云つても國庫歳入の中で最も主要なもの

は租税であるが、これはいかに變化するかと云ふと、從價税法によるものと從量税法によるものによつて大きな相違が出來て来る。從價税の方は其價格に從つて附加する税であるから、價格が増せば租税収入は從つて増加して来るから、物價が騰貴すれば此税目に屬して居るものは増収となる。しかるに從量税によるものは價格には關はずにたゞ數量を標準にしてかける税であるから、物價が騰貴した所で何にもならず、此點では物價騰貴が何等のよい結果をも來さない。そればかりではなく、物價の騰貴が通貨膨脹による一般的原因から生じたものでなく、供給の缺乏からでも生じたものである場合には、從量税の収入は反對に減少さへするものである。

そこで問題は租税の中で此兩者の中どつちに屬するものが多いかと云ふことになるのであるが、從價税に屬するものは營業税であるとか、所得税であるとか、登録税であるとか云ふものだけであつて、全租税収入中の約十分の三位しかないのである。其他の大部分即ち十分ノ七は

かりは悉く従量税によるもの許りであるから、差引いて見れば、物價騰貴によつて収入の増加するものは小部分であつて、大部分は何の變化もないか、寧ろ収入減少の怖れのあるもの許りだと云はねばならぬのである。

以上の事實を綜合して見ると國庫の歳入が物價騰貴によつて増加する率は、そんなに大きいものではないと云ふことがわかるのである。

しかるに今度は歳出の方はいかなる影響を蒙るであらうかと云ふと、これは殆ど例外無しに一般的に増加ばかりして來るものである。國庫の歳出は大きく分ければ人件費と、物件費との二つになる。此内人件費の方は官吏の俸給其他、人に關する費用であつて、物件費に較べれば其金額も四分ノ一以下に止まつて居るが、これは物價が騰貴したからと云つて即時に直接の影響は少く、たゞ漸次に膨脹して來る。官吏の俸給にしても物價が騰つたからと云つて、すぐに増俸するものではないが、しかし物價が引續いて騰つて行く時にはいやでも増額されねばなら

ぬことになつて來る。戦後物價騰貴が依然たるものがあつたので、官吏の俸給令による支出も倍加されるやうになつた例の如きがそれである。

しかるに一方物件費の方はどうかと云へば、これは物に對する費用であるから、其物の價格が騰貴すれば即時に直接の影響を蒙つて支出は増加して來る。物價が五割騰れば物件費もすぐに五割増加して來るものと見て差支へない。そして前に述べた通りに國庫の支出の中で物件費は重要な大部分を占めて居るものなので、物價の騰貴によつて國家の歳出は著るしく増加して來ることは疑ひのない所である。

以上國庫の歳入と歳出とが物價騰貴によつてそれ／＼變動を來してくることを述べたが、此兩者を比較すれば、誰しも直にわかるやうに歳入の増加は小部分であつて、歳出の増加は大部分なのであるから差引き歳出の方が多くなつて豫算の辻褄が合はなくなつてくることは明かである。

此最もよい具體的の實例は戰時中から戰後へかけての我國の物價騰貴と、國費の膨脹とを對比すれば、何もかも明瞭なことであつて、戰後は追加豫算の計上高も著るしく増加し、戰時中から見れば、僅數年の間に豫算は三四割も増加されて居るのである。これは明かに物價騰貴が國費を膨脹させるものであることを明示したもので、殊に急激に物價騰貴が來た場合には追加豫算を計上せねば辻褃が合はなくなることを考へ合せれば、物價騰貴は歳入歳出共に等しく増加させるので豫算額は膨脹するが實質に於ては差引大差はないから財政上苦しくなるとは云へぬと云ふやうな議論には根本的の錯誤のあることがわかるのである。

かやうに物價の騰貴はあらゆる點から見ても、國費を増させ、同時に財政上の苦楚困難を導き易いものと云はねばならぬのである。

猶以上の言は國家財政について述べた所であるが、それよりも小さい公共團體等についても略ほ同様のことが云はれ得るものであつて、物價が騰貴した場合には収入よりも支出が多くな

つて、會計が苦しくなつてくるのは疑はれない事實なのである。

第六章 物價と生活費問題

(一) 物價は生活費問題の基調である

前章に於て私は物價の變動がいかに大きな影響を各方面に及ぼすかについて述べた。物價の騰貴は大は國家から小は各個人の生活にまで重大な影響を及ぼして来る。然し乍ら眞に物價騰貴の影響の重大さは何の點に於て現はれるかと云へば、それは決して其損害の金額の大小によるものではなくして生きるか死ぬかと云ふ根本問題に觸れて来る點にある。此意味に於て物價騰貴を最も眞剣に考量する必要があるものは、それと生活問題との關係である。

大よそ人間の此世にあつて最も最大の關心事は生きること、食ふことである。われ／＼は現に關東の大震災に於てこの切實なる體驗を経て來て居る。大事件が起つた時に人は何を欲するか

と云へばたゞ生命擁護あるのみである。財産も名譽も地位も、其他あらゆる欲望は悉く消え去つて、たゞ自己の生命を擁護すると云ふ一事のみになつてしまふのである。渦巻く火の子に圍まれた時、人は生命から二番目として大切に持つてゐたものまでも平氣に抛つたゞ生命の安全だつたことばかりを唯一の愉びとするものである。さて生命が安全になると次には其生命をいかにして繋ぐべきか、つまりいかにして喰ふものを得べきかと云ふことが最大の關心事になつて来る。いよく喰ふものがなくなつて來れば人間は草の葉でも木の根でも食ふ。露西亞の飢饉には人間の肉さへも喰つた。

かやうな不測の事件の時のことは例外であるといへばそれまでのことではあるが、實は平常日々の我々の平和な生活に於ても矢張り、此食ふこと、生きることが最大の重大事になつて來てゐることは争はれない。こゝに於てか生活費はわれ／＼の經濟生活の根本をなすものとなつて來るのである。

我々の社會には種々の階級があり、種々の地位職業のものが入混つてゐる。しかし乍ら大觀すれば、所謂資本家階級（上中流に屬する）はこれを勞働者階級（下流のもの）に較べれば其數に於て遙かに少いのである。言を換て云へば、此世に生きて居る多數のものは貧しいのである。これらの貧しい階級のものには肉體的勞働者にしても、亦た薄給で生活して居る會社員や官吏の如き精神的勞働者にして見ても、多數のものは辛うじて月々の收支を合してゆく、かつかつの暮し方をして居るしかるに物價が上つてゆくと、収入の方はこれに伴つて、すぐに騰つてゆかぬので、慘澹たる生活難に襲はれて、人間最初で且つ最後の慾求である生きることに、食ふことに脅かされて來ることになる。恐らく何が苦しいと云つて此生活の根本を脅かされる位の苦痛はなく、此爲めには人は悪事をも平氣で行へば、不道德なことをも平氣で敢てするやうになつてくるのである。百般の社會問題の禍根はこゝに横たはる。こゝに於てか私は云ふ、物價は生活の基調を爲すものであると。

しかし乍ら生活問題に密接な關係を有するものは、全般を通じての物價其ものではなくして其中の所謂生活必需品である。既に物價の概念を解説した中に説いたやうに、物價とは總ての商品の價格を全體的に見たものなのであるから其中には生活必需品ばかりではなく、奢侈に屬するものもあれば、普通の生活をして行くのには、更に必要のないやうなものまでも含まれてゐる。それ故に若しも贅澤なものや、不必要品だけが突飛な値段に騰貴した場合にも、元より全體として見た物價は上騰の計算となるのではあるが、其中の生活必需品が騰らずに居るならばそれは國民の生活問題には、何等の影響をも及ぼしては來ない。しかしこれが生活必需品即ち、それが無ければ、人間として生きて行くこと、食つて行くことが出來ないと思はれるものが上騰した場合には非常な影響を生活に及ぼして來る。それ故に本來、實社會に活用する上から見れば、物價は一般物價と共に、生活必需品だけの物價調査を必要とする譯なのである。英國等ではこの點に細心の注意を拂つて、勞働者でも殊に生活必需品の物價調査を行つて、各勞

働組合は、これを労働運動の重要な基礎として常に注意を拂ふことを怠らない。我國でも生活費としての調査を特に行つてゐる所も三四無いではないが、一般には此點が閑却され勝たないので何んと云つても、物價の實際的研究上の大きな缺點だと云はなければならぬ。商業會議所其他での日用小賣品調などは、生活費と云ふ目安の下に行はれて居るものと思はれるが、其品目を調べて見れば、生きる爲め、食ふ爲めに必要なものばかりではない憾みが多い。

しからは生活必需品とは何であらうかと云ふと、それは人間として人並に生きて行くに缺く可からざるものを云ふ。私共はこゝに人間として生きて行くには必要なものを云ふ。第一に食糧品である、今日では榮養研究も盛んになつて、人間一人生きて行くには何カロリーの榮養量が必要であるかと云ふやうな研究まで出来上つて居るが贅澤な高價な食物は別として少くも普通人並の食物には自ら標準が出来上つてゐる。こゝに生活必需品中の食糧品とは是等のものを指す

のであつて、塩ばかり嘗めても人の生命はある程度までは保てやうけれども、鹽で榮養不良となつて、労働にも能率を減退し、病み衰へることにならう。そこでこゝに食糧とは少くも榮養不良にもならず、人並に攝取し得る最低食糧品を指して云ふのである。第二に家賃である。人として生きるには雨露を凌ぎ得る適當な家屋の必要であることは云ふまでもない。家は贅澤を云へば限りないにしても數十人の者が廣くもない部屋にゴロ／＼圍り合ふと云ふやうな不衛生なものでもなく、一家族が少くも一つの家なり、一かまへの部屋なりを専有し得るものでなければならぬ。第三が衣服である。これも種類は雑多であるけれども寒暑をそれ／＼に適合するやうな、寒からず暑からず、しかも人前に出てさうみつともなくないだけのものゝ一揃ひは人間として是非備へなければならぬ。第四が燃料である。食物の調理や、寒氣に對する防備、並に夜の燈火、これだけはいやでも必要となる。

以上述べたやうなものは何れも人間として人間らしく生きて行く爲めには必要缺くべからざ

るものであつて、何を置いてもこれだけの量を用意とは總ての人になければならない。しかも人は一人で生きて居られるものではなく、男女共に相當の年齢になれば結婚して一家を持ち、養つて子女をも養はねばならぬものであるから、これらの生活必需品は其家族を標準にして備へらるべきものなのである。

しかるに物價が著るしく騰貴して是等の生活必需品の價格が、貧しき者の收入を超過することになれば、彼等の生活は直に脅かされて、借金其他の無理をして暮して行くか、然らずんば所謂人間らしからぬ、人以下の生活に落なければならぬやうになつてしまふ。人間が人間らしからぬ生活に落るほど危険で不幸なことはない。あらゆる不祥事はこゝから激發されて行く。そこで今日では、世界を通じてこの勞働社會は何れも、此點を力説して、所謂『人間らしく生きる權利』を主張するのである。そして、物價騰貴によつて彼等の此生きる權利が脅かされ出した時に、最低生活費としての勞銀の獲得が主張され出すのである。

(二) 生活必需品と勞働問題

物價騰貴によつて生活に脅威を感じるものは之を階級的に云へば勞働者階級であり。物價が騰貴した場合に先づ有利になるものは、生産に従事して居る資本家階級であることは既に述べた所であるが、其結果、生産規模の擴張となり、利子や地代は之に伴つて上騰して來ることにも前に述べた通りである。そこで若しも物價騰貴と共に勞銀も直に上騰するものであるならば、勞働者階級が直に生活に脅威を感じると云ふ點は大分に緩和されるであらう。しかるに事實に於て勞銀は騰るにしても最も遅く上る。何故に然るか云へば、それは今日の生産經濟組織が根本に於て資本家に左右されるやうに出來て居るからである。勞働運動が盛んになつて來て勞資の關係は昔日とは其面目を改めるやうになつたと云へ、何と云つても今日では猶資本主義萬能であつて、大きな資本を擁して居る資本家は全生産に關する權能を把持し、勞働者

は單に自分の勞働を市場で賣ると云ふに過ぎない。しかるに勞働は他の商品と違つて、値が下れば賣らずに待つて居て値上りを待つと云ふことの出来ないものである。小さい生産業者にも此惱みのないことはなく、現に大正十三年の春繭などは、大震災のあとを受けて、アメリカの生絲が暴落し、非道い苦境に陥つてしまつたので製絲家も問屋も四苦八苦の行き詰りに陥りはしたものの、一番ひどい打撃を受けたのは繭を作る人々であつて、彼等は資力のない所から製絲家に安く踏み倒されて買はれるばかりでなく、繭其ものが永く保存出来ないで、見すく安いと思ひながらも賣急がねばならぬやうな状態になつてゐる所が丁度勞働の賣急ぎと似て居る點もある。しかし乍らかやうな繭でも餘りに安値となれば、乾繭と云ふ工夫も出て來れば、他の副業に代り得る工夫もつく、しかるに勞働の方はまるでかゝる力を持つてゐない。勞銀が安いからと云つて、勞働者はこれを賣らずにいつまでも値の上るまで待つてゐると云ふことが出來かねる。彼等はいかにしても生きて行かなければならず、食つて行かなければならないから

である。更に熟練工は別であるが普通の未熟練工になるといくらでも代りがある。これらの勞働はいつも需要よりも供給の方が過剩になり勝つものであから、其勞銀が安いからと云つて、賣るのを差控れば、いくらでも安いので我慢すると云ふ他の代位者が流れこんでくるので資本家は一向に困らない。こゝに於てか勞銀の決定權は資本家の手に握られて居て、勞働者はたゞそれに従ふと云ふ立場にあるのである。これは勞働組合などが、もつと發達して有力なものとなつて來れば當然此状態は變つて來るに相違なく、現に英國などでは組合の發達が著しいだけに、勞働者の勞銀引上げ要求も可成りに容れられるやうになり、又一方には勞働者の生産管理と云ふことが熱望されて、所謂ナシヨナリゼーション即ち炭坑だの鐵道だの其他重要産業を國有にして、資本家の横暴な經營から脱して、勞働者の經營參加を計らうとする運動なども行はれて居る位ではあるが、我國の今日の現状ではまだ、こんな氣運は一向に待つて來ず、産業の全經營權は資本主義萬能の下に、たゞ資本家の思ふまゝに行はれ、勞働者はたゞ資本家の

爲すがまゝに其の勞銀を決定されると云ふ状態にあるのである。

かやうな有様であるから物價が騰貴した場合にも、利子歩合などは金融の逼迫すると共にいやでも昂騰して來るので資本家も止むを得ず之に従つて居るが、勞銀の點になると資本家が其實權を握つて居るので中々上騰させやうとはしない。勞銀の上騰はそれだけ資本家の利益を減ずることになるからである。尤も勞銀の上騰はこれを消費者側に轉嫁してしまへば、資本家の利益を減じないですむではないかと云ふものもあるかも知れないが、消費者にばかり負擔を重くすることは需要の減退を來す怖れがあり、生産者としてはなる可く需要の現狀を擴張せしめて然も利益を餘分に獲得しようとするは當然なやり口なのである。此物價の永續性に對する危懼は他の方面から見て勞銀の上騰を遅らせる有力な理由であつて、物價は騰つて利益は多くなつたからと云つて、勞銀をすぐに上騰せしめた揚句に、物價がすぐにでも下りでもした時には、資本家は膨脹した生産費の爲めに苦しめられて反對に非常な損失を招く危険がある。そ

ここで資本家は物價の上騰がある程度まで永續性のあることの見込みが立つまでは、生産費を無暗に増加せしめることをなるべく避けるやうに努めるのである。かう云ふ理由の爲めにどうしても勞銀は生産費中で最も遅れて騰ると云ふ傾向を免れないのである。

かやうに勞銀は物價上騰の場合に、いつも最後に上げられるのであるから、其間勞働者は收入が減少したと同様の苦しさを忍ばなければならぬのである。それも一般物價の騰貴が生活に不必要な特殊な商品の騰貴に原因する一部分的のものであるならば何でもないのであるが、それが一般的騰貴の原因から生じたり、或は生活必需品、特に米價等が非常に暴騰でもした場合彼等が蒙る生活上の打撃は致命的にさへなるのである。

貯蓄のない所謂手から口へと其日暮しの貧しい暮しをしてゐる勞働者達が、生きる爲め、食ふためには是非共必要なものゝ値段を上げられて血と涙で高いものを買ひながら、一方勞銀の方は資本主義制度のもとに、これも蓄積の出來ない、ごく弱い勞働と云ふ武器だけを唯一の頼みに

して、泣く／＼居据りのまゝの収入で、日夜を明して行かねばならぬ様は考へるだに悲愴なこ
とだと云はなければならぬ。

古人も「衣食足つて禮節を知る。」と云つた。食ふことが出来なくなれば人間は鬼にもなれば
蛇にもなる。險惡な思想も世に漲らざるを得ない。労働問題は決して衣食だけが充たされない
からと云ふ小さい原因からばかり生れ出るものでは素よりないが、尠くも我國では、この食ふ
こと生きることと云ふ要求の不滿から来る労働争議が決して小事だとばかり云ふことは出来な
いのである。

以上は物價が騰貴して生活の脅かされる場合の事であるが、労働者の苦楚は獨物價騰貴の場
合にばかり起るものではない。之と反對に物價が非常に低落した場合にもこれに劣らない脅威
を感じてくるものである。

物價が非常に低落して來れば、生産者は何れも高い原料を持ち、莫大な固定資本を投じた工

場とか機械とかの設備の負擔に苦しみ、いやでも生産の制限を行ひ、規模を整理縮小して、生
産費の低下を試み、出来るだけ經費のかゝらぬ經營法を専念に努めることになつて來る。かゝ
る場合に當然起つて來るのは労働者の人員淘汰であつて不景氣が大きければ大きい程、労働者
の失業は増加するものである。労働者階級にとつて此失業と云ふこと程、重大な打撃はない。
物價が上騰して、事業界が隆盛である時は、労働の上り方は少いと云ふ不平はあつても、それ
でも事業の擴張に伴つて労働力の需要も激増するので、資本家も出来るだけ労働者の集中に努
め、失業と云ふ憂ひなどは尠い、よしんば失業してもすぐに他の職を求めて其労働を賣ること
が出来ると。しかるにこれが反對に不景氣でどこの事業も不振となつて、淘汰整理を行ひ出すや
うになると、失業するものばかりが増加して、需要するものがまるで尠くなるので、労働の賣
り場もなく、買ひ手もなくなつて、労働はいくらでも競争的にせり下げられてくる。かくして
失業してしまつたものは素よりのこと、淘汰されなかつたものも其労働を引下げられることに

なる。前の例から云へば物價が下落して生活必需品が安くなれば、それだけ暮しは楽になる筈であるが、事實に於ては勞銀が引下げられるから、物價下落による利益は相殺されて何もならなくなる。そればかりではなく、失業者と云ふ根本的に生活の資を奪はれる悲惨な人々を續出せしめるの不幸を見ることになつてしまふのである。資本家は其點に於ては甚だ冷酷なものであつて、勞働者の淘汰については何の遠慮も用捨もなく、而も退職手當金と云ふやうなものも甚だ少いのが例である。我國にはまだ失業保険制度も實施されて居らなければ、勞働組合の救濟組合としての職分も完全には行はれて居らない。英國あたりは此點では随分良い設備のとつてある國ではあるけれども、しかも戦後の失業者増加に對してはいかなる政府も持あつかつて名案はなかつた。ロイド・ジョージ氏のやうな鬼才を以てしても、結局、土木工事の促進位な所でお茶を濁して置く他はなかつた有様で、次に代つた保守黨内閣も、ボルドーウキン氏の時に、失業對策に關する非難が多く、遂に内閣を持ち切れずに倒れてしまつた位である。ボル

ドーウキン内閣の没落の直接の原因になつた保護關稅政策でも其もとを云へば、これによつて國內の産業を振興させ、失業者の救濟に充てようと云ふ窮餘の策に他ならなかつたのである。英國などですら斯様な有様なのであるから、我國のやうに勞働施設の不完全な國では、失業者の増加はどうも仕末のしやうもない。そして勢ひのおもむく所は人心の險惡と、輕擧の續出となり、延いて社會を不安裡に沈涵させることになり易いのである。

かう考へてくれば物價の變動は、單にそれが騰貴のみではなく、下落の場合に於ても、その程度が甚だしければ、いつも勞働者に非常な影響と打撃を與へ、しかも其影響も打撃も決して部分的のものではなく、根本的に彼等の生活を脅かす死活問題となつて來るのである。資本家も物價が下落して事業不振になつた時には破綻者を續出し、昨日の大名、今日は乞食の悲惨な境遇に陥ることも珍らしくはないけれども、しかも好況の場合には例外なしに巨富を收めて目に餘るやうな贅澤な生活を營んで憚らないものである。かの戦時中に於ける成金なるものゝ

豪華振りを見ても其一端を知り得るであらう。しかるに労働者の方は不況時代に失業の苦を嘗める悲惨は云ふまでもなく、よしんば好況になつた所で、其所得は成金のそれに對比すれば云ふに足りないものであるばかりではなく、勞銀の上騰が生活費の上騰より遅れ勝な所から、常に不安な生活に脅かされねばならぬとは餘りに公平を失したものと云はねばならない。物價と労働問題とを研究する者は、まづ此根本の不合理について一考を要するものがあらう。

(三) 一般物價と切放して考へねばならぬ生計調査

以上述べた所によつて物價の變動がいかんにかに労働者初め俸給生活を營む下級の官吏や、會社銀行員等に非常な大影響を及ぼすかの大體を記し終つたのであるが、かゝる大影響を及ぼすものは等しく物價と云つてもあらゆる代表的の商品を網羅した一般物價ではなくして、吾々の生計になくてならぬ生活必需品のことである。それ故社會的の見地から見れば、物價の調査はどう

しても一般物價と同時に、それと切放して生活必需品の物價を求め、それを以て勞銀なり俸給なりを變動せしめる基礎標準たらしめねばならぬのである。一家の生計の安固は、かゝる調査が完全に行はれ、それが社會政策に巧に利用された時に初めて期せらるべきものである。

素より國民の生計調査は家族の人数により、住所の如何により、職業の種類により千差萬別であつて、其標準を求むることは中々容易の業ではないが、尠くも各種別を通じて第一節に述べたやうな食料、住宅、衣類、燃料等に關する必需品の物價調査だけは是非共作り求めたいものである。

既に記述したことではあるが英國では勞働省が生活費物價調査なるものをきまつて發表し、勞銀は大體これによつて左右されるの傾向をもつて居り、獨逸でも同様の試みをしてゐる。しかるに我國では此點が甚だ不完全であつて、信據するに足るものが尠い。今後物價の重要さが國民に理解される程度の高まるにつれて、かゝる特殊な意味を持つた調査の必要は愈々多く

なつて行くことであらう。

左に此問題に對する一参考として農商務省農務局が發表した『歐洲大戰前を基準とせる重要農産物の東京に於ける市價指數比較表』を載せて置くことにする。素よりこれを以て生活必需品の物價調査であると云ふことの出来ないのは勿論のことであるが、他の日用品小賣價格はこれ程總括的に比較を求めることが困難なものが多く、それに、此比較表は兎も角も重要食料品を含み、それに燃料、被服材料等も加はつてゐるので、大體に於て吾々の生計に必要なものが毎年いかに其價格が移り行きつゝあるかの概念だけは得られるであらうと考へからである。

8 年	3 9.5
9 年	337.5
1 0 年	313.4
1 1 年	322.5
以上3箇年平均	324.5
以上5箇年平均	303.6
大正12年 1 月	316.2
2 月	308.5
3 月	297.9
4 月	295.5
5 月	290.2
6 月	318.8
7 月	297.3
8 月	297.6
9 月	331.4
1 0 月	327.1
1 1 月	322.0
1 2 月	332.3
平 均	315.4
大正13年 1 月	342.8
2 月	305.4
3 月	303.8
4 月	294.4
5 月	289.1

第七章 政府の力による物價調節

(一) 物價調節と云ふこと

物價の變動は之を社會問題として觀察する時非常に重大なものとなつて來る。その影響する所が人間の生存權をさへ脅かす場合が出來て來るからである。それ故餘りに激しい物價の變動のあつた場合にはいつの世、いかなる社會にあつても、きまつて物價調節と云ふことが論議され實行されるに到るのである。

併し乍ら元來物價は社會が進歩して行くに従つて漸を追うて騰貴して行くことは自然の理であるから何も騰貴其ものを目の敵にして之を防止すべきものではなく又無理に調節しようとして調節出来るものでもないことは勿論であるばかりでなく、物價は大體に於て需給關係によつ

て動き、その需給は常に自然的の調節によつて波瀾ありと見えても、臆ては平調に歸り、丁度波の去來が動搖常なく見えながら、しかも水準はいつもある一定の高さを保つやうに、さして變調續きの流れ方をしないものである。しかし又中には餘りこの點に囚はれて物價調節其ものに根本的の反對をして、いかなる場合にも人間的調節は不自然であると論ずるものもある。米價が非常に暴騰して國民の生活の基礎が脅かされると云ふ時に、所謂家傳の寶刀の鞘を拂つて、暴利取締令を出したり、政府の強制的買上を行ふと、反對に米價は少しも下らずに反つて騰つてしまふ。これ人爲を以て自然を征服しようとする爲めの失敗である、天から落下する巨石を受けとめて落すまいとすれば、一時半時はよく之を支へても地球の引力と云ふ大法則には遂に抗し難くして人は其石を投げ出さずには濟むまいと、かゝる論者は云ふ。

物價を人爲的に動かさうとするのは誤りであると云ふかう云ふ論者の云ふ所にも半面の理はある。しかしそれは、物價の變動が全く自然的の原因によつて來た場合にのみ通用すること

あつて、これを原則とすることは出来ない。もしも物價變動の因つて來る原因に人爲的作用が含まれて居るならばこれは人爲を以て飽までも調節せねばならないものである。人は自然に抗することが出来ないかも知れない。しかし人は、人には抗することが出来る。人間に對する人間の對抗は當然のこと、云ふ可きである。

次に世人は物價の調節と云へば、いつも物價騰貴を調節するものゝやうに考へるが、非常に下落した場合にも素より物價調節は行はれる。たゞ調節の必要のある場合は騰貴の方が多く、又騰貴の方が事實上最も頻繁に遭遇する問題なので、以下に述べることも自然此物價騰貴に對する對策を主とすることゝなつてゐるのである。

世界大戰後世界を通じて例外なしに物價は騰貴したので、各國の政府も民間も一意、物價を下落させることに其精力を集中して、さまざまの政策を行つて來た。しかしかゝる諸政策はこれを何れも一樣に見ることは出ないのであつて、大きく別れば、一時的の物價騰貴を調節する

政策と、永久に互つて物價の不自然な騰貴を防止する政策との二つに分けることが出来る。更に又別の見方から見れば政府が物價調節に力めるものと、民間の各人の努力によつてこれを爲すべきものとの二つに分けることも出来る。私はこゝに記述の便宜上後者をとつて、政府の力によるものと民間の力と自覺に待つものとの二つに大別して調節方法を解説して行かうと思ふ。一時的のものと永久的政策との別は、此二大別の何れにも含まれて居ることを豫じめ頭にに入れて讀み進まれんことを希望するものである。

(二) 通貨の縮少

物價を一般的に騰貴させる原因が通貨の膨脹にあることは既に第三章に記した通りである。我國でも政友會の連中は政權を握つて居つた當時、極力通貨膨脹が物價騰貴の原因ではなく、寧ろ物價騰貴が通貨膨脹の因となつたものであると云つて、騰貴の原因を需要の増加や、供給

の減少、其他運賃の上騰等に嫁さうと必死の努力をしたものであるが、かゝる見方の間違ひであることは今更こゝに喩々するの必要を認めない。現に何よりもよい證據となる可きものは過去に於ける統計を徴して見れば明かなことで兌換券の發行高が増大し、銀行預金が増して小切手や手形の流通が非常に殖えて來ると必ず物價の騰貴が、これとほぼ同歩調で伴はれて來ることであつて、これは獨我國だけのことではなく、世界を通じて、多少特殊な事情で例外のものもあるが皆同様の統計を示して居るのである。事實の前には千百の議論も矛を收めなければならぬ。通貨の膨脹が物價騰貴に大した影響を及ぼさぬものだと云ふやうな暴論は此事實に向つて何の説明も出来ない筈なのである。

我國では戦時から戦後にかけて驚くべき物價騰貴が續き、英米より其指數に於て遙かに上位にあつたのである。これは何故かと云へば、我國特有の通貨膨脹を促進する事情のもとにあつたからである。歐洲戦争以前の過去に於ける我國は打續く國難によつて、すつかり貧しい、借

金許り多い國になつて居たので、政府は出来るだけ正貨を集めて手放すまいとばかり考へてゐた。しかも其正貨を充分に得ることは逆も六つかしい事であつて兌換券を日本銀行から發行するにしても其準備にあたるだけの正貨は何時になつたら持つことが出来るかわからぬやうに思はれたので、正貨準備の金額の兌換券を發行することが出来、一億二千萬圓の保證準備を許し更に制限外發行を認めることにしたのであつた。それ故日本銀行は正貨が増えれば増えるだけいくらでも兌換券を發行することが出来るわけなのである。それも平生の場合であつたならば假りに正貨が非常に殖えて、兌換券が必要以上に無暗に多くなるとすれば、兌換券を日本銀行に提供して金貨を受取つて藏つて置くとか、或は製造工業用の爲めに鑄潰して使用すとか、或は金の輸出をする。つまり爲替關係から云つて、外國への支拂を爲替でするよりも正貨で送つた方が、安い時に金貨で拂つて外國へ流出させると云ふやうな調節方法で無暗に正貨が殖えることから防ぎ得るわけなのである。所が、我國は大正六年から金の輸出を禁止し、金貨を鑄

潰すことも禁止され、國民が金貨を持つて喜ぶと云ふこともないので、事實に於て正貨は殖えれば殖えるだけ蓄積されると云ふことになつて居たのである。そこへ持つて來て戦時戦後の我貿易は随分振るひつゞけて、貿易上並に貿易外の我對外受取勘定は非常に多額に上つて來た爲めに國內にある正貨は殖える一方で減らなかつた。しかるに現行の兌換制度が、正貨さへあればいくらそれが殖えても其あるだけの正貨を引あてに兌換券を發行することが出来ること云ふことになつてゐるのであるから、兌換券はどしどし發行されて、通貨の大膨脹となり、物價の騰貴を著るしくさせるやうになつたと云ふわけなのである。更に悪い事には兌換券の發行は日本の國の中にある正貨だけではなく、在外正貨をも引あてに發行することが出来るやうになつてゐたので、日本銀行としては、景氣がよくな外 國からの受取勘定が非常に殖えて來た時には、市場の需要以上であることはわかつてゐてもドシ／＼兌換券を増發し得たわけである。此は、在外正貨引あての兌換券發行だけは、加藤（友三郎）内閣の時に物價調節の第一案として兎も

角も除外されてしまふことになつた。此事實は何れにしても通貨の膨脹が物價騰貴の原因となることを政府が承認して其對策を講じたものに他ならぬと云へるのである。以上のようなわけで通貨の膨脹が一般物價騰貴に最も有力な原因となることは疑ひのない所であるから、政府としては物價が非常に騰貴して國民に及ぼす悪影響が看過することの出来難いやうな場合には、まづその騰貴が特殊なものであるか、一般的のものであるかを見、もし一般的に騰貴して居るとすれば、それは必ずや通貨と關係あるものと見てよいので、其點に適當の研究と考量とを費して、膨脹した通貨を縮少することを計らねばならぬのである。戦後の英國などは矢張り非道い物價騰貴の爲めに國民が苦しみ續けたので、政府は一意専心之が對策に腐心して、財政政策の根本方針として通貨の收縮を計りつゞけて來た。其爲め外債の打切りであるとか、銀行利子の引上だとかいろいろの方策をとつて來たのであるが、其結果物價の上騰は確に妨げたのであるが、當然の影響として商工業の不振となり、労働問題から云

へば失業者の増加となつて來て、所謂痛し痒しの状態に陥つてしまつた。そこで英國政府の方針も最初ロイド・ジョージ内閣時代に覺悟し實行して來たやうな思ひ切つた通貨縮少政策はだんだんに緩和されては來たものゝ、兎に角、此縮少政策が、物價騰貴の大勢を漸次に順調に引戻して來たのは疑ひのない所なのである。

さて一般的物價の騰貴が通貨の膨脹にあるとするならば、之が調節策としては通貨を縮少させる他はないのであるが、しからば其實際的の方策としてはいかにしたらばよいかと云へば、或は金利の引上であるとか、海外への投資奨励であるとか内債の募集であるとか、いろいろの議論をするものもあるが結局其根本から云へば兌換券發行を減少せねばならぬやうな直接の方策をとるのが一番近道である。特に兌換券制度に通貨膨脹を助長するやうな缺點でもあるならばその點を改めて正常な道に歸さしめるの他はない。我國などに於て殊に其必要を痛感するのである。そこで私はまづ此點の調節策から述べて見ることにする。

(三) 金輸出禁止の解禁

通貨の異常なる膨脹が物價騰貴の一般的原因であることが疑ひ無い以上、これを調節する爲めには兌換券發行を縮少せしむるの他ないが、其方策として戦後頻りに唱へられたものは金の輸出禁止を解いて正貨を自由に海外に流出せしめよと云ふことであつた。

戦時中は各國共に多額の正貨を所有せねばならぬ自衛上何れも金の輸出を禁止し我國でも大正六年の九月から引續き之を禁止して居るのであるが、其後戦後になつて物價騰貴が世界的の惱みとなるに及んでは、この解禁説が獨我國ばかりではなく、英國にも米國にも行はれるやうになつた。しかし乍ら實際此解禁を斷行したものは米國が大正八年の七月に決行しただけであつて英も佛も伊も我國も今日まで依然として禁止を續けて來てゐる。金の自由市場を以て誇りとしてゐた英國が依然輸出禁止をつゞけて、米國だけが解禁をしたと云ふことは兩國の戦争に

よる富力の相違によるものであつて、米國は戦時中に最も有利な國となつて國內に莫大な富を蓄積し得たからのことである。

金の輸出禁止を解くがいと云ふ主張にはさまざまの理由も算へられて居るが、根本的に云へば大體二つになつてしまふ。即ち第一は正貨準備が多ければ、それだけそれを引充てにして發行される兌換券の額は多くなり、通貨膨脹して物價を騰貴せしめることになる。それ故に、此方面からの物價調節としてはどうしても兌換券の發行を少くしてしまふの他はなく、それは兌換券發行の基礎となる正貨を減少せしめるのが一番に近道で、先づ以て金の輸出禁止を解き、いくらでも海外に正貨が流れ出るやうにすれば、それだけ正貨準備は減少して兌換券は増發しやうがなくなつて來ると云ふのであつて、第二には金の輸出を禁止してしまふ爲めに、禁止を解いた國との爲替關係は不利になり、貿易上から云へば輸入が沮まれ、いつまでも安い外國商品を入れることが出來ず、其爲めに自國の高い物價を引下げる競争品がないことになつて、

物價は依然として高い所に止まつてばかり居ることになる。だから金の輸出禁止を解けば、爲替は上つて来て、今度は輸入に便利になり、安い外國の商品がどんく入つて来るから高い自國の物價を競争上いやでも引下けることになるであらうと云ふのである。

事實上金の輸出禁止が爲替相場を下落させるのは確なことであつて、若し此禁止を解けば、非常に有利に回復するかどうかは其國の他の事情にもよることではあるが、兎にも角にも爲替相場が現送點（正金を輸送する場合のこと）以下になると云ふことだけは防ぐことが出来る。それ故經濟學の理屈通りに云へば、爲替相場が上りさへしたらそれだけ輸出には不利になつて輸入が有利になつてくるから安い外國商品が餘計に入つてくる筈であるが事實に於ては必ずしもさうではなく、一國の物價騰貴を調節する程、著るしく入ることなどはないのが近時の例である。たと第一の場合の作用だけは間違ひなく行はれる。つまり一國の正貨が外國へ流出してしまつて、それだけ正貨準備が減れば、それを引あての兌換券發行高も減らねばならぬこと

になるから、此意味に於ける物價調節は有力なものとなつてくるのである。尤もこれは正常な國について云ふことであつて、正貨準備の有無に拘はらず矢鱈に兌換券を發行する國、たとへば獨逸のやうなものは、こんな法則はあてはまらない。かゝる國の兌換券は事實上不換紙幣の濫發に他ならないので、對外爲替は輪轉機の廻る速度に反比例して下落もするし、反對に物價は輪轉機の回轉速度に正比例して上騰もするのである。

さて然らば此金の輸出解禁論に對する反對はどうであるかと云ふと、正貨が非常に多くなつてそれを引あてに兌換券がドシ／＼膨脹して居つて、しかも其正貨の流出を依然として禁止して居ると云ふ、たゞそれだけの單純な場合には解禁論に正面から反對し得る議論はどこにも見出し得ない筈である。たゞ之に反對するのは、其時、其國の特殊な條件の下に、其條件を矢面に立て、反對するだけのことである。たとへば我國で數年前から金の輸出解禁論が頻りに朝野で論議された時に、最も有力で且つ理由のある正しい反對は、先づ兌換券發行制度の改革を前

提としなければ、いくら金の輸出許り行つた所で、一向通貨の縮少にはならないと云ふ説や、解禁をすれば、いやでも輸入は有利となるものであるから、此際輸入を更に多くするやうな方策は取る可からざるものであると云ふ説やが行はれたが如きはこれである。原則として見る時には一國の物價騰貴が通貨の大膨脹により、大膨脹が金の輸出禁止と云ふやうな不自然な原因によるものである場合には當然解禁は一日も早く行はねばならぬ筈のものである。

我國では近年此問題が幾度か論ぜられつゞけて來たが政府は、解禁の原則については反對しないが、所謂時機尙早と云ふので其まゝになり、聽て關東の大震災となつて百般の事情が一變して來た爲めに、可成り強硬な解禁の主張者も、解禁よりも、もつと先にせねばならぬことが多くなつたので其まゝとなり、所謂帝國經濟會議の金融部會の決議も、成る可く速かに解禁することゝ云ふに止まつてゐた。何分にも大震災後の我國の貿易は驚く可き入超續きで大正十三年一月から五月迄でも六億二千萬圓近くの大入超と云ふ有様となり爲替相場は激落して對米

相場は平準點から二割も下落すると云ふ有様なので、この時に金の輸出禁止を解くとすれば、正貨は一時に海外に流出して爲替相場は一時に暴騰し、既に輸入品の手持のあるものは何れも大打撃を受けることになつて經濟界は大動搖を來すことになつて來るので、先づ他の方策で貿易を平調に復させ、對米爲替相場も平準點以下二割と云ふやうな暴落状態から改まつた時を待つて解禁をするより他はないだらう。さう云ふやうな順調の時が來たならば不自然な金の輸出禁止と云ふやうな言は一刻も早く解く可きは當然のことであつて今更多言を要するまでもない話なのである。

(四) 通貨縮少策としての金利引上と對外投資並に公

社債の募集

次に前章に述べたやうな、歐洲大戰後各國に起つた金輸出禁止と云ふ臨時的の通貨膨脹の對策でなく、平時に於て行はる可き通貨縮少策について述べて見れば、それは大よそ、三つあ

る。即ち金利の引上げ、對外投資、公社債の募集がそれである。

先づ第一のものから云へば、日本銀行が金利を引上げた場合には通貨は縮少して来る。元來日本銀行の兌換券なるものは銀行との取引から生れるものであつて、銀行が相手方に對して割引をした手形に對して再割引や貸付を申し出て來るとそれに兌換銀行券を渡し、それを受取つた銀行が其兌換券で又割引貸付をすると云ふ順序になつてゐるのである。だから日本銀行が金利を引上げて再割引や貸付の利率を高めれば、それでは引合はぬものが澤山に出來てくるから手形の割引、貸付を申し出るものゝ數が少なくなつて來てそれだけ兌換券の發行高は減少して來ることになる。そして満期になつた割引手形は其まゝ貸付た金が日本銀行に回收されてしまふので、兌換券はそれだけ發行されないわけなのである。かやうに日銀の金利引上げはいやでも兌換券發行高の減少となつて通貨は収縮して來るが、これは餘程考へてから行はないと經濟界に非常な打撃を與へることになる。つまり金利が高くなれば商買が少しばかりの利益では引合な

くなつてくるので勢ひ事業の収縮と云ふことになる。失業者は増加して各方面に打撃と影響を與へてくることになる。一番近い例は戦後の英國の通貨収縮政策で政府はどこまでも金利の引上げを主眼とし、千九百二十一年に銀行利子を七分に引上げて一ケ年間据置き、大藏省證券も其年中六分五厘の利率を保つやうにしたので其年の秋頃から商工業はすつかり振るはなくなり、通貨膨脹の方は防ぎ得たけれども、それと同時に其年の四月に三十四萬人ばかりだつた失業者が一時に増えて翌年即ち千九百二十一年三月には百五十萬人になつてしまつたと云ふやうな例もある。それ故此金利の引上げと云ふ事は實蹟は擧がるけれどもよく其時の經濟界の大勢の赴く所を察知してやらないと、角を撓めて牛を殺すやうなことにもなり易いものなのである。爲政者としては充分に考量すべき問題なのである。

次に海外投資の場合には投資したゞけの正貨は海外に流れて行くので、それだけ兌換券膨脹の勢をそぐことになる。けれども海外投資は結局どこまでも自國の債權として残つて居るの

でそれを以て根本的に通貨を縮少する策と見ることは出来ない。更に困難なのは適當な投資の對手の見出し難いことであつて結局一助成策たるに止まるものである。

第三の公社債の募集は兌換券が膨脹して多くなつてゐるので政府が公債を募集して民間に散らばつて居る通貨を吸収してしまへば、それだけ通貨が縮少すると云ふ理由によるものであるが、さて實際上から云ふとかゝる方策は中々實行難なのである。何故實行難かと云へば、かくして集められた金の使用道奈何と云ふことであつて、たゞ金を集めて金庫に收めて置くか、又は海外への投資に振向けるのもあれば、それだけの通貨は収縮したものと云へるけれども、若し其金を國內で他の事業に投資するやうなことになるれば、折角集めて収縮したつもりで居つた通貨は再び他の方面へ流れ出して通貨を膨脹させて來る。通貨が膨脹した折に下層民の金を収縮する目的で小額公債などを郵便局から賣出させることをやるが、これが實際に通貨収縮に効力を及ぼすことは中々に困難である。

以上のやうに海外投資と云ひ公社債の發行と云ひこれを以て通貨収縮を計らうとするのは効力が甚だ微弱であつて、金利の引上げのみは現實に効果があるとは云ふものゝ、他に通貨収縮以上の打撃を與へるの怖れがある。かく考へ合せれば通貨収縮は兌換券發行そのものに直接に制限を加へる最上方策であつて且つ最も捷徑であると云はねばならぬであらう。

(五) 暴利其他の取締

通貨の變動のやうな一般的原因以外に物價が暴騰する場合は主として需給の關係による。供給が乏しくなつて需給を充すに足らなくなつた場合には商品の價格が騰貴するのは當然の結果であつてこれを調節するものは結局、需要の減退か、供給の増加か何れかの自然的原因による他はないものである。これを人爲を以て左右し價格の暴騰だけを人の力で抑へようとしてもそれは結局失敗の他はないのである。この意味に於て、米價が暴騰などをした場合に政府が行ふ

所謂暴利取締令などは根本的の調節策としては何等の期待をも持ち得ないものである。自然の需給關係から来る價格の變動は、自然の手を以て癒すの他に道はなく、人爲は此處では決して根本的の威力を持つものではないからである。

しかし乍らかかる價格の暴騰の場合には、自然的原因から来る變動でなく、必ずこれに投機者が加はつて彌が上に價格を不自然な程度まで釣上げて行くものなのである。買占め賣借しみなどは其一例である。かう云ふやうな時に政府が奸商の取締りを爲し、不自然に價格を釣上げようとするものを罰し、買占めや賣借み其他投機行爲によつて價格を釣上げる行爲を禁止したりするのは必要なことである。

大正六年米價が空前の大暴騰を來した時に時の農商務大臣仲小路氏が所謂傳家の寶刀たる暴利取締令を出して奸商征伐を試みたのは、結局其効果から云ふと莫大な費用を失つただけのこととて何の實績も擧らなかつたけれども事の成敗は初めから解つてゐたことで、自然の需給から

來た騰貴をいかに傳家の寶刀でも、それだけで調節し得ると考へるのは考へる方が間違ひであつた。たゞこれによつて不當な行爲ばかりする奸商達を脅かして強慾な行動を抑へたことだけで意味はあるのである。

たゞ政府が暴利取締令を出す時には、多くは一つの商品だけに向つて之を適用して、其他の方面に手ぬかりを生ずるので奸商達は巧みに法令の裏を掻いて反つて取締令あるが爲めにいよいよ價格の騰貴を助長させるやうな場合も多くあるのである。爲政者としては單に形式だけの取締りでなく、之の抜道、其他騰貴を助長させる諸機關に向つて同時に監督を怠らぬやうにせねばならぬものである。

次に之と關聯して商品價格の監督に必要なものは、生産者の團體である、同業組合、聯合會と云ふやうなものに對して不斷の注意と監督とを忘れてはならない。

生産者の團體の中で最も注意すべきは同業組合法の下に組織されて居る各産業の同業組合な

るものである。元來同業組合なるものは同一の業務に従事して居るもの、便宜と連絡とを保ち分立から生ずる不統一を免れしめようとするものであるが事實に於て、かゝる組合は、團結の力を擁して價格の協定を行ひ、市價の下落を防ぐに汲々として、それが有力であればある程、同業組合に屬す商品は殆んど獨占と選ぶ所なき弊害を生ずるものである。かの紡績聯合會が少しく紡績界が不況になれば、すぐに繰業短縮を計畫して居るものなどは其好箇の適例である。暴利取締も政府として爲すべきことではあるが同時に、かゝる團結の力によつて競争を防止し生産制減其他で常に利益の少しでも多からんことのみを計つてゐる同業組合に對しても適當の制裁を實行すべきものである。當局としては不都合の行爲があつた場合には用捨なく組合の反省をうながすに足るだけの手段に出づるを至當とする。單にある商品が特殊に暴騰した場合に一部の當業者だけに暴利取締令を適用するが如きはそもそも未である。要は不斷の注意を平素から拂ふにある。

(六) 政府自ら需給の調節に參與する方策

物價の調節には以上のやうな間接的な政策ばかりでなく、政府自ら其當事者となつて需給の調節に參加し直接に調節の衝に當ることもある。たとへば商品の需要が盛んであつて供給がこれに伴はず價格が暴騰を續けるやうな場合には政府が自分から生産者の立場になつて其生産に従事することもあれば、外國から安い貨物を輸入して自らこれを國內で賣ることもある。又外國から輸入せずして國內で買上げて安く賣ることもある、本年米が端境期までに殘存米が少い爲めに結局供給不足を見越して騰貴し出した時に、政府が所謂外米の買上、即ち支那米や蘭貢米のやうなものを貿易商に入札させて買入れ、安い米を入れて供給の不足を補ふことにしたのなども其例である。かやうに外米の輸入だけでなく、安い時に内地米を買付けて置いてこれを市場の時期を見ては缺乏を補ふ目的で賣却拂下をすることもある。總て斯様な場合に政府は自

ら需給の當事者となつたとて、何もこれによつて利益を収めようと云ふのが目的ではなく、國內の物價の異常な變動を調節しようとするのが主眼であるから賣出しの場合には損失を敢てしてこれに當るものである。或る專賣品の價格を引下げるに當つて、他の各種の專賣收益の一部を犠牲にして之に充當せしめるのも矢張り同様である。

次に政府自ら事に當らないでも當業者を奨励して殆んど政府自ら事を行ふのと同様の効果を收めんとする場合もある。かの低利資金の融通であるとか、補助金の交附であるとか、配當の政府補償であるとか云ふやうなものは皆これである。嘗て生絲の市價が暴落した時に之を救済する意味に於て、政府が補助して帝國蠶絲會社を成立せしめたが如きは其一例である。此帝國蠶絲會社の最初は缺損の筈であつたものであるが、其後生絲の價格が恐ろしく上騰して、手持ち品の値上りの爲めに逆に莫大な儲けとなり、其利益金分配方法で紛糾を重ねるに到つたなどは面白い一挿話だと云はなければならぬ。

最後に政府自らの生産従事又は監理ではないが、直接に需給を調節する意味に於て効果のあるものは貿易上の施設である。即ち商品の價格が暴騰した時に其商品の輸出を制限し又は禁止して内地の供給高を減少せしめない事で、これは戦時中の歐洲諸國に於て頻りに行はれた所である。又一方に於ては安い外國品を輸入せしめて内地の高い商品價格を供給の増加によつて調節することもあり、其方策として實施されるものは關稅の輕減や免除等で、大震災後三月三十一日まで復舊に要する材量や食糧品などの關稅の輕減免除を行つたなども其一例である。木材などは震災後一時供給が缺乏した爲めに驚くべき高値となつて常識では考へられないやうな高價なバラツクが建てられたものであるが、關稅免除のお蔭で其後アメリカから莫大な數量の安い木材が輸入されて來たので、忽ちにして供給過剩となり、數ヶ月を出でない内に市價は暴落を來して逆に木材商の破綻をさへ傳へられるやうになつた。復興局などは一時に非常な數量の木材を米國に注文してしまつたので、いよいよ入荷されて見ると其處分に困り、拂下をしよ

うにも安くなりすぎた木材市場は此上供給過剰になつては、どんな暴落を來すかも知れないと云ふので拂下も見合せとなつて、時折、時機を見ては拂下ると云ふことにきまつた位である。總てかやうな關稅の輕減や免除其他引下けんとする消費稅や營業稅の減免などは、それだけ租稅收入が減少するので國家財政上から見れば大きな負擔となるのであるが、かゝる負擔は丁度政府が自ら生産に従事した場合に損失を覺悟してやると同様に、物價政策上の當然の犠牲であるといふはなければならぬのである。

(七) 政府の物價公定

普通の場合に於ては商品の價格は非常に騰貴するにしても、總て需給の自然的調節によつて低落して來るものであることは、以前に述べて置いた通りである。しかるに實際の場合に際しては此需給の自然的調節が中々に行はれず價格が騰貴しつゞけても供給が圓滑に増加して來な

いやうな場合が少からずある。かやうな場合に、いつまでも自然のままに放任して置けば國民の生活上非常に重大な悪影響を及ぼして來ることが多いので、政府が強制的にある一定の價格を定めてそれを標準にして賣買を行はせるやうにすることがあるのである。此標準價格を稱して公定價格と云ふのである。

公定價格には二種ある。一つはある商品の最高價格を定めて商人をしてそれ以上の價格で賣ることのないやうにするのである。他の一つは最低價格を定めて置いてそれ以上の値段で賣らせることにするのである。此最低價格が公定された場合には價格はそれ以下に下ることのないのを保證されて居るものであるから生産者は安心して生産を増加することが出來、其結果供給が増して來ることになるのであるが、これは多くの場合には一般に行はれない。物價騰貴の場合に普通に行はれるのは消費者の立場から見て、ある一定の價格以上に騰貴しないやうにと云ふ意見から最高價格を決定されるのが常例である。

此最高價格の公定は非常に消費者側にとつては便利なものゝやうに思はれて、價格がそれ以上無暗に釣り上つて行く憂ひが取除かれるものゝやうに考へられるが、さて實際はさう理窟通りには行かぬものである。元々其價格の騰貴は供給の不足から來たものであつて需要を満たし得ないことが明かなのであるから、たとひ政府が最高價格を定めて、それ以上に賣つてはならぬと定めて見た所で、商人の方でそれで賣らぬと云ふ態度を示すならば消費者の迷惑は依然として除かれるわけには行かない。況してや其商品が生活の必需品でもあつた場合にはいかに最高價格は定められてゐても、商人が賣らぬ以上は、止むを得ないので、最高價格以上の金を出してそつと買求めると云ふことになる。かくして最高價格の決定は結局物價の下落に何の實效もない許りでなく、反つて其騰貴を一層甚だしからしめるやうな結果にもなつてしまふものなのである。

そこで眞に徹底的に最高價格の公定を有效ならしめやうと思ふならば、公定と同時に國家や

公共團體が自ら其生産を經營監視するだけの勇氣と實行力とを持たなければならぬ。これだけの準備があつて商人が最高價格で賣ることを肯じない場合にはいつでもこれに代り得るだけの用意があれば初めて公定價格は完全に行はれ、生産者も亦それに従つて商品を賣るやうな經營方法をとらなければならぬやうになつて來る。しかし乍ら其實行は云ふ可くして中々容易な業ではない。何故ならば政府其他公共團體の生産の經營監視は經濟組織の根本的改革を行はなければ完璧を期することは事實上不可能になつてしまふからである。

之を實例にとつて見ても諸外國共に公定價格が成功したものは多くは國家非常の時に多く歐洲の大戦當時までは可也徹底的にこれが行はれて居たが、平時の場合にはどうしても完全には行はれる見込のないものである。加藤友三郎内閣の當時其物價調節策の中に、日常必需品の價格を調査して、之を公示することゝ云ふ項目を設けたが、これなども結局は何にもならない實效の伴はぬものとなる他はなかつた。第一に價格を公定すると云ふことが其標準を求めると困

戰であるて、眞に完全なものを求めやうとするれば、政府からも生産者、消費者からも信頼するに足る委員を出して公正に之を定めるより他に途がない。かゝることは容易でないばかりでなく、且つよしんば其價格が求められたにしても、その實行が困難であることは前に述べた如くであるからである。

要するに最高價格の公定の如きは人間は甚だ美しいものであるが、實行力に乏しく、國家非常の秋などを除いては大なる期待をこれに持つことは出来ないものなのである。

(八) 政府自ら消費縮少

物價は根本的に云へば需給によつて調節される。需要が供給以上に上るの勢ひであればこそ商品の價格も昂騰しつゞけて行くのであるから反對に、需要が減少しつゞけて行けば物價はいやでも下らねばならぬ筈のものである。そこで需要者として最大のもは何人であるかと云へ

ば、それは政府自身に他ならない。政府は毎年の豫算に於て莫大なる人件費並に物件費を計上して之を消費するものであつて、物件費は其まゝ貨物に對して支拂はれ、人件費は、人に對して支拂はれるが、支拂はれた人はそれで品物を購買するので直接にも間接にも政府の消費額は一國の需要方面に大關係を有することは疑ひのないことである。それ故に若しもこの最大の消費者たる政府が自ら率先して冗費をはぶき、無駄な不急な事業を打ち切り、消費量を尠なくすれば、それだけ速かに需要關係を調節して供給に餘剰を生じ、物價の低落に力あることはこれ亦見易きの理である。

世界の各國は戰後何れも此方面に銳意努力して行政財政の整理に努めたのであつた。この努力の眞摯であつて、決斷力に富んで居る國程、戰後の整理も速に行はれ、國力は恢復して、物價の異常な騰貴を防ぎ止めることが出来たのであつた。

我國の豫算は戰後年々膨脹して止まるところを知らないの概があつた。これは一面から云へ

ば物價騰貴其ものゝ爲めに人件費、物件費共に膨脹を餘儀なくされたものであることは事實であるが、何も必ずしもそればかりで國費が膨脹を來して居るわけではない。誰人も異論のない所であらうけれども戦時戦後に國富の増加したのに乘じて我國の行政財政は必要以上に膨脹して擴張新設の相ついだことは争はれない。國力が伸張していくらでも其擴張なり新設なりが生きて行く場合には素よりこれは差支へないが、一旦經濟的不況の時代となつたならば、まづ第一に緊縮すべきものは政府の行政財政の整理でなければならぬ。

かくして政府歳出の減少を計れば一面に於ては需要を減少させて供給に餘剰を生じさせ、同時に歳入をも減縮させて濟むわけであるので、租税を整理して物價昂騰の一原因となる關稅、其他の一般の消費稅等をも減免廢止せしむることも可能であり、外債募集のやうな物價騰貴の因となるものをも中止せしめることが出来るであらう。

かく各方面から見て政府自ら消費を縮少することは物價の下落に多大の力のあるものである

から爲政者としては不況時に際しては先づ自ら範を示す覺悟を以て財政行政の整理に力を盡すべきである。

以上述べ來つた多くの政府の力による物價調節策の他に、或は運賃の輕減を計る方策をとるとか（殊に我國のやうに鐵道が國有である國に於ては、一層其必要が緊切である）小運送の改善を促すとか、公設市場の發展を計るとか、取引所銀行其他の投機的行爲を取締るとか云ふやうな政策も其時々によつて適當に行はるべきものであるけれども、こゝには以上の一斑だけを記すに止めて置くことにする。